

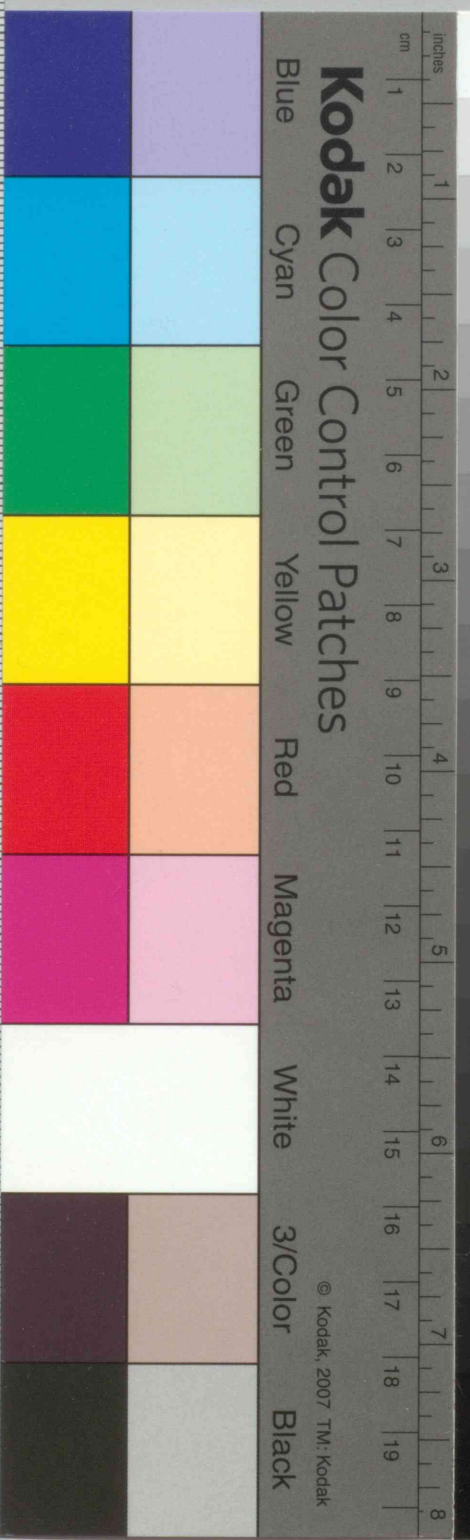
大正女子國文讀本

第二修正版

卷七

3759
H019
資料室

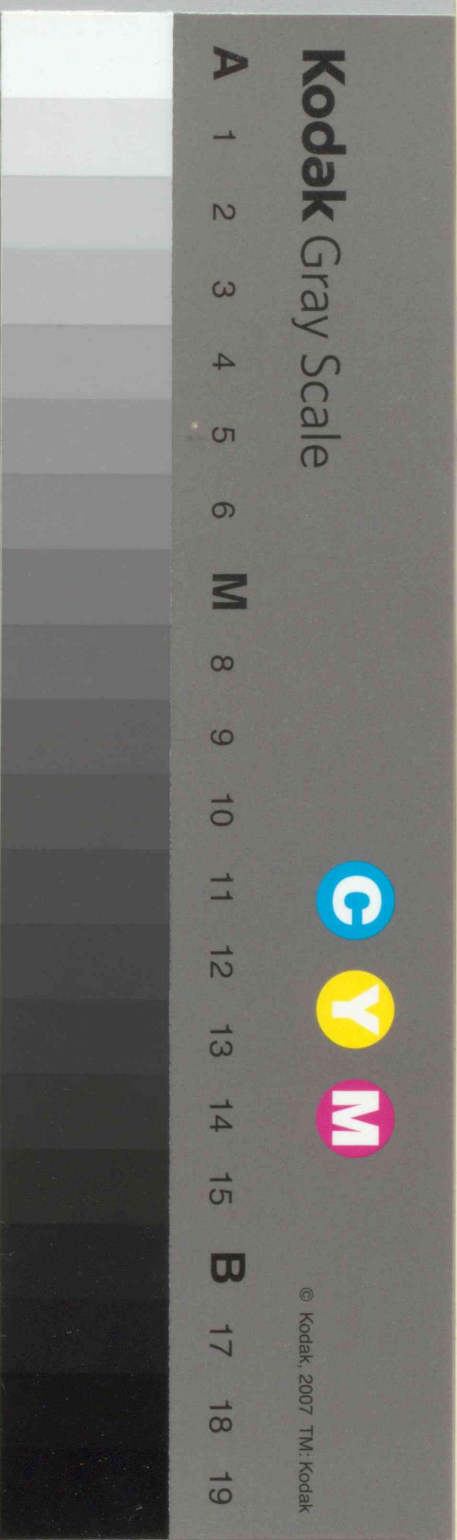
Handwritten notes and sketches on the book cover, including the characters '大正女子' and various drawings of figures and objects.



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

42202
教科書文庫

4
810
42-1925
20003
01737

6-54
1247

保科考一編



女子國文讀本



東京 會社 育英書院 發行

大正女子國文讀本 卷七

目次

一	花のさだめ	本居 宜長	一
二	蛙の聲	長 塚 節	四
三	スキスの春	榎 有 恒	一〇
四	櫻 詠	(續 狂言記)	一九
五	阿新丸その一	(太 平 記)	三
六	阿新丸その二		六
七	五月雨の詩趣	近 松 秋 江	三
八	詩二篇		四
一	祈 願	三 木 露 風	四

目

次

二	霧ふる宵	河井 醉茗	二五
九	小雀と親鳥	泉 鏡花	五
一〇	子供の國	水谷まさる	五一
一一	御嶽山頂の雲	吉江 孤雁	五五
一二	太田道灌	大町 桂月	六〇
一三	平家のあはれ		六五
一	故郷の花	(源平盛衰記)	七
二	小枝の笛	(平家物語)	七
一四	泉	徳富 蘆花	七
一五	湖畔の感想	下田 將美	八
一六	仁和寺の法師	吉田 兼好	全
一	石清水		八五

二	鼎かづき		六
一七	地平線	吉江 喬松	六八
一八	旅ごころ	島崎 藤村	九四
一九	愛兒の記念	藤岡作太郎	九六
二〇	伴の世話になりし禮狀	頼 梅 颯	一〇二
二一	和歌の感興	(駿臺雜誌)	一〇六
二二	顯家卿の北の方	(吉野拾遺)	一〇
二三	御袖の涙	香川 敬三	二四
二四	茶小品	(茶選集)	二八
一	雞の蹴合		二八
二	老 懷		二九
三	丸儲け		三〇

二五	筆の歌……………	武島 羽衣 二三
二六	布施太子の出城 その一……………	倉田 百三 二三
二七	布施太子の出城 その二……………	…………… 二五
二八	布施太子の出城 その三……………	…………… 二五



大正女子國文讀本 卷七

一 花のさだめ

花はさくら。さくらは、山櫻の葉あかくてりて細きがまばらにまじりて、花しげく咲きたるは、又たくふべき物もなく、うき世のものとも思はれず。葉青くて花のまばらなるは、こよなくおくれたり。

とよむいふやまもみ人さる
 朝日あけほろいそらるる

本居宣長の筆蹟

大かた山櫻といふ中にも、しなぐのありて、こまかに見れば、一本

ごとにいさゝか變れるところありて、またまた同じきはなきやう
なり。すべてくもれる日の空に見あげたるは、花の色あざやかな
らず。松などの青や
かにしげりたるこな
たに咲けるは、ことに
色はえて見ゆ。空き
よくはれたる日、日影
のさすかたより見た
るは、にほひこよなく
て、おなじ花ともおほ
梅は紅梅、ひらけさし
に、やう／＼しられ
さくらの咲け



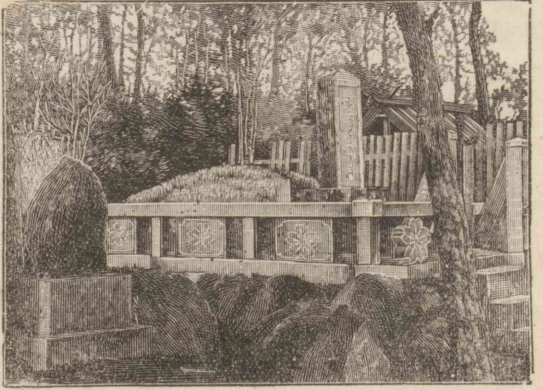
えぬまでなむ。朝日はさらなり、夕ばえも。梅は紅梅、ひらけさし
たるほどぞいとめでたきを、さかりになるまゝに、やう／＼しられ
ゆきて、見どころなくなるこそいとくちをしけれ。さくらの咲け

本 居 宣 長
たに咲けるは、ことに
色はえて見ゆ。空き
よくはれたる日、日影
のさすかたより見た
るは、にほひこよなく
て、おなじ花ともおほ

ありて世の中云々
のこりなく散
るぞめでたき
櫻花ありて世
の中はてのう
ければ(古今
集) 讀人知ら

るころまでも、散ることしらで、むげににほひなく、ねびれしほみて
残りたるを見れば、げにありて世の中は何事もみなかくこそと、見
る春ごとに思ひ知らるかし。白きは
すべて香こそあれ、見るめはしなおく
れたり。大かた梅の花は、ちひさき枝
を物にさして、ちかく見たるぞ、梢なが
らよりはまされる。桃の花は、あまた
咲きつゝきたるを遠く見たるはよし、
ちかくてはひなびたり。山吹、かきつ
ばた、なでしこ、萩、すゝきをみなへしな
ど、とり／＼にめでたし、菊もよきほ
どにつくろひたるこそよけれ、あまり麗はしく、したゝかにつくり
なしたるは、なかなか品なくなつかしからず。つゝじ、野山に多

本居宣長の墓



本居宣長

國學者。號は
鈴の屋。享和
元年歿、七十
二歳

く咲きたるは目覺るこゝちす。海棠といふもの、唐めきてこまやかに、麗はしき花なり、そもくかくいふは、みなおのが思ふ心こそあれ。人は又おもふ心ことなるべければ、ひとやうに定むべきわざにはあらず。又いまやうの世の人もてはやすめる花どもも、世におほかるをかぞへいてぬは、ことさらめきたるやうなれど、歌にもよみたらず、ふるき物にも見えたることなきは、心のなしにや、なつかしからずおほゆかし。されどそれはたひとやうなるひがごゝろにやあらむ。

(本居宣長―玉かつま)

二 蛙の聲

春は空から、さうして土から微に動く。毎日のやうに西から埃を捲いて來る疾風が、どうかすると、はたと止つて、空際にふわ〜とした綿のやうな白い雲が、ほつかりと暖い日光を浴びようとして

僅に立ちあがつたといふやうに、動きもしないで、ぢつとして居ることがある。水に近い濕つた土が、暖い日光を思ふ、ぞんぶんに吸うて、其の勢づいた土の微な刺戟を根に感ぜしめるので、田圃の榛の木の地味な蕾は、目に立たぬ間に少しづつ、延びて、ひら〜と動き易くなる。其の刺戟から、蛙はまだ蟄居の状態にありながら、稀にはそつちでもこつちでも、く〜と鳴きだすことがある。空から射す日の光は、そろ〜と熱度を増して、土はそれを幾ら吸うても止めようとせぬ。土は凡てをだん〜と刺戟して、堀の邊には蘆やとだしばや、其の他の草が、空と相映じてすつきりと其の首を上げる。軟さに満された空氣を更に鈍くするやうに、榛の木の花はひら〜と止まず動きながら、煤のやうな花粉を撒散らして居る。蛙は假死の状態から離れて、軟かな草の上に手を突いては、驚いたやうな容子をして空を仰いで見る。さうして彼等は慌て

たやうに聲を放つて、其の長い眠から復活したことを空に向つて告げる。遠く聞く時は、彼等の騒しい聲は、只空にのみ響いて快けてある。

彼等は更に、春の到來を一切の生物に向つて告げ知らせる。草や木が心づいて、其の活力を存分に發揮するのを見ないうちは、鳴くことを止めまいと力める。田圃の榛の木は疾うに花を捨てて、自分先きに若葉の姿に成つて見せる。黄色味を含んだ若葉が、爽かで且朗かな朝日を浴びて快い光を保ちながら、蒼い空の下に、まだたゆたうて居る周圍の林を見る。岬のやうな形に這うて居る水田を抱へて、周圍の林は、漸く其の本性のまに、白つぼいのや、赤つぼいのや、黄色つぼいのや、いろくりに茂つて、それが氣が付いた時に急いで一つの深い緑になるのである。雑木林のそこらこゝらに散在して居る開墾地の麥も、すつと首を出して、蠶豆の花も可

憐な黒い瞳を集めて、耻かしさうに葉の間からこつそりと四方を覗く。雑木林の間には又、芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。其の麥や芒の下に居を求める雲雀が、時々空を占めて、春が深けたと喚びかける。さうすると、其の同族の聲のみが空間を支配して居る可き筈だと思つて居る蛙は、其の囀る聲を壓し去らうとして、互の身體を飛びこえ飛びこえて鳴きたてるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。さうしては、蛙の鳴かぬ日中のみ之を仰げば、眩ゆさに堪へぬやうに、其の身を遙に煌めく日の光の中に没して、其の小さな喉の裂けるまでは劇しく鳴かうとするのである。蛙は愈益、鳴き誇つて、檜の木やうな常緑木の古葉をも一時にからりと落さねば止むまいとする。

此の時、凡ての樹木や、それから冬季の間にはぐつたりと地に附い居た、すべての雑草が爪立して、只空へ空へと暖かな光を求めて止

まぬ。土がそれをちつと曳きとめて放さない。それで一切の草木は、土と直角の度を保つてゐる。冬季の間は土と平行することを好んで居た人も、鐵の針が磁石に吸はれる如く土に直立して、てんでに手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲しいと人が思ふ時、蛙は一齊に裂けるかと思ふ程喉の袋をふくらませて、身を撼がしながら殊更に鳴きたてる。白い經絲のやうな雨は、水が田に滿つるまで注いで、又注ぐ。鳴くべき時に鳴く爲にのみ生れて來た蛙は、苜蓿を打返し、働いて居る人々の、周圍から足下から逼つて、敏捷に其の手を動かせ動かせと促して止まぬ。蛙がびつたりと聲を呑む時には、日中の暖さに人もぐつたりとなつて、田圃の短い草にごろりと横になる。更に蛙は、ひつそりと靜かな夜になると、如何に自分の聲が遠く且遙に響くかを誇るものゝ如く力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢる時、蛙の聲

はめつきり遠く隔つて、それがぐつたりと疲れた耳を擦つて、百姓の凡てを安らかな眠に誘ふのである。熟睡することによつて、百姓は皆、短い時間に肉體の消耗を恢復する。彼等が雨戸の隙間から射す夜明の白い光に驚いて、蒲團を蹴つて外に出ると、今更のやうに耳に迫る蛙の聲に其の覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に、全く朝の元氣を喚びかへすのである。草木は、遠く遙に響くと鳴く其の聲に撼られつゝ、夜の中に成長する。櫟や檜や其の他の雑木は、蛙が鳴けば鳴くほど、さうしてそれが鳴きやむ季節までは幾らでも繁茂することを繼續しようとする。其處には毛蟲や其の他のあさましい損害が或は有るにしても、しと／＼と屢、梢を打つ雨が、空の蒼さを移したかと思ふやうに、力強い深い緑が地上に掩うて、爽かな涼しい蔭を作るのである。

(長塚節 土)

長塚節
小説家。故人
大正四年二月
歿三十七歳

三 スキスの春

南歐から寄せる春の光が、アルペンを一帯に被ひひたすと、山村の春は谷から登つて来る。南面した山の裾の雪が斑に融けて枯草の地が露はれると、そこには清い小川が躍つて流れる。もう積雪も底から緩んでしまつたのだ。そして漂ふ空氣すら甘い。その甘い大氣が暖い光と共に、あらゆる生物に蘇生の活力を與へる。先づアルペンの山麓に消えゆく雪を追うて、春の到来を喜び歌ふものはクロカスの花の群だ。始は雪の消え間を縫つて咲くが、その中に、一時にどつと見渡すかぎりの山麓を被ふ。その白と薄紫の花が、葉よりも早く咲出て縦横に消え溢る雪を追ふ。しかし未だスキーをしようとするならば、北面の裾に行くがいゝ。山陰の傾斜には未だ日の光も訪れず、積雪も尺二尺の深さはある。そこには冬が固く凍つて、最後の抵抗をなして守つてゐる。だが、どう

してももう華やかな季節だ。

空も深く碧いが柔かい。その柔かい光を浴びて、鋭い雪の山々がまどろむこともある。長い冬を狭い小屋の中に閉ぢこめられてゐた牛共も、放たれて若草を食んで居る。其の頸に振る鈴の音が、麗かな谷の上を彼方此方に響く。子供も嬉しいのであらう、未だ芽も出ない梢に高く登つて、牧歌を歌つてゐる。櫓が何時の間にか車に代つて、雪解道を軌つて行く。農夫達は冬の間、山から櫓で下した木を、一尺位づつに切割つて、此の一年の薪を作つて居る。木を股木の上に載せて、二人で挽くのだ。何處の百姓家でもこの薪を挽く音がする。私も二三度ピーターの家に手傳に行つた。薪を切つたならそれを家の外に奇麗に積重ねるのだ。側に手傳つて居る妹のアリスは、可愛い、眼をして小歌を歌つて居る。ちやうど春の明方に囀る小鳥のやうな子だ。

テ
ル
物
語
ス
キ
ス
の
義
民
ウ
キ
ス
の
義
民
テ
ル
の
書
を
書
いた
物
語
の
文
豪
の
作
家
ル
イ
ツ
の
文
豪
の
作
家

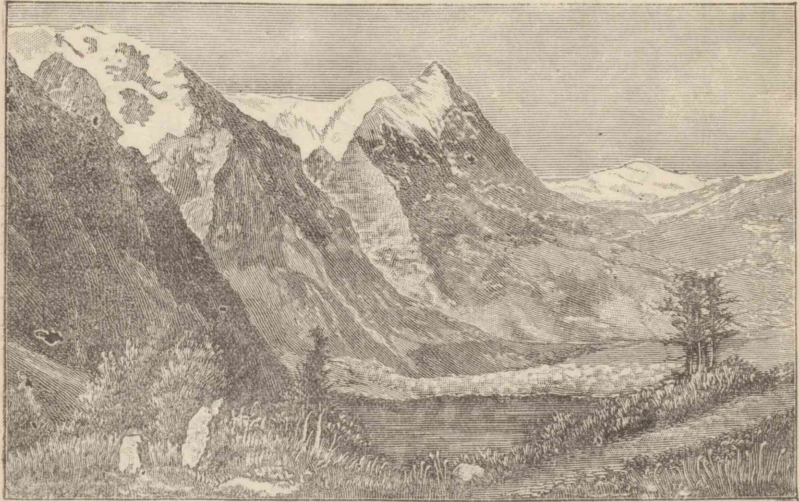
山國の冬は長い。長いが勤勉な農夫達は惰眠を貪つてゐる餘暇を持たない。彼等は冬を通して、秋に刈取つたアルプの岩の蔭や小屋に貯へた秣を櫛で運び下ろす。伐材は雪のある間の仕事の一つだ。秣や木材を満載した櫛を引いて下つて来る。夏の間は私有の牧場の中を歩くことは厳しく禁じられてあるが、積雪の後には何處を通つても自由である。かゝる習慣法が存在してゐるのである。その雪に蓋はれた山麓を、櫛を後に、兩足で舵をとつて来る。櫛の重量が總身に、そして兩足に落懸る。鐵のやうな嚴丈な脚に、底の七分以上もある靴を穿いてゐる。靴には鋼鐵の鋏を牙のやうに植ゑてあるので、雪に喰ひこんで勢を制することが出来る。登る時には頭上に空櫛を擔つて行く。故に彼等は皆テル物語の繪に見るやうな豪快な體格を持つてゐる。男共が外で忙しい時には、女共は家の中で羊毛を紡いで布を織る。この激しい

労働の身體を養ふものは、少量の肉とミルクとチーズと馬鈴薯と黒パンに過ぎない。そして此のやうな單純な食物に満足して、高燥な空氣や強い日光に曝された頑強な人達を、煤煙と白粉とで固めた都會人は田舎者として蔑んで居る。田舎者は因習的に色の蒼白い都人士を、自分等より遙かに偉いものと思つて居る。だから祖先傳來の仕事を捨てて、他所に出稼する者が多い。スミス人が下男や下働として忠勤なことは、イギリスあたりでは有名なものだ。かくしてイギリスやイタリー・フランス等に下男や下働となつて山國の人の精勤な性情を現すが、いつしか歲月はその若い時と共に過ぎ去つて、たゞ老い果てた自分と悔いが見出される。そして少年の頃に、無邪氣に歌ひ暮した故郷の山村を思ふ情に堪へ切れなくなつて、再び歸つて来る。その時にも、山は變りなく美しい夕映えをしてゐよう。だがそれ

は、遊子の仰ぐ幻想の映光ではない。荒涼たる人生晩年の落日だ。土地に残つた子供とてさうだ。親子代々の仕事は、大概其の日暮しの生活である。四周を取巻く國々が如何に榮えても、激烈な國際間の生存競争には、スキスのやうな小國の、奥まつた山村の貧乏百姓はどうする事も出来ない。たゞ親の譲つた二匹の牛を守り、狭い畑に馬鈴薯を作つて、それを食つて行くだけである。しかしながら、此の轉變の人間社會に比して、變りの見えないのは自然だ。アリスの歌に聞きとれてゐる中に、雪は消え切つて、牧場も道も露はれて来る。露はれた牧場では女子供が石を拾ふ。霜解けて地上に出された小石を、草刈の時に鎌の刃をいたためぬやうに拾ひ寄せるのであつた。その後、牛の下肥の乾したのを、熊手のやうな道具で丹念に蒔散らす。彼等には、牧草の良否が重大なのである。このやうに、日毎春先の務に、人も自然も忙しい時にも

思出したやうに雪が降る。そしてフェーンが飛ぶ。フェーンといふのは、山麓を吹捲くる強烈な熱風であつて、大概南北に通ずる谿谷に起る。農家やアルプの小屋の屋根を剝がし、樹木を倒すことがある。折角日の光の喜を浴びた若葉も小枝も、毫り散らされる。山も鳴る。氷河の上に黒雲が渦巻き反つて吠える。人も家畜も、小さくなつて荒れ狂ふ天を仰ぐ。かゝる時の火事を怖れて、フェーンの吹く間は往來での喫煙を禁止してゐる村さへある。フェーンは大抵一日で通過して、其の後には大雪が降る。そして三四日の後には再び春の長閑な空合がまどろむ。此の時である、驚歎すべき大雪崩が斷崖に絶間なく懸るのは。安全な遠く離れた野に座して、咲亂れた草花などを眺めて居る。すると、何處ともなく遠雷の響がする。思はず空を仰いで見るが、片雲すらない静かな日和である。と見る間に、前の斷崖に白銀の

グリンデル
ヴァルト
スキースの南方
山地にある村



グリンデルヴァルト地方

瀧がかゝる。それが刻一刻と量を増して、濛々たる雲煙を擧げて落下する。強い響が地を揺がし、紺青の深い大氣を震はして轟く。しかし暫くこの瀧が續いて居る中に、絹糸のやうに細れて行く。瀧は懸崖を段より段へと落下して、雲煙を中空に奔放させる。やがて雪崩は、谷や或は氷河の上や、或は峽谷の間に落切つて、四邊は再び元の麗かな安靜に歸る。グリンデルヴァルトに居る時であ

ヴェッター
ホルン
アルプス山脈
中の一峯

つた。村から東方一哩ばかりのヴェッターホルンの北面に近い五千尺近くの斷崖に雪崩が懸つた。私はスキーを穿いて其の落ちた雪を見に行つた。遠方からは全く一條の瀑布としか見えなかつたが、行つて見て、驚くべし、二三十尺から五六十尺の深さに、幅一町程、長さ五六町にわたつて雪塊が壞亂して谷を埋めて居つた。單に遠方から眺めただけでは、雲煙の如く見えただけのも、實は十尺も二十尺もある雪塊が、幾十幾百或は幾千と落下するのである。てあるから、かゝる大きな雪崩の前には、人力を以てしては如何とも抵抗

アルプスの雪崩



サンバーナ
アド犬
アルプス山脈
中のサンバー
ナド時にあ
る僧院に飼
はれてゐる
旅人が雪中
に用ひるに
救ふ爲に
たれた

しがたい。のみならず激しい時には、落下に先だつ風の爲に樹木
薙倒される事もあるくらゐだといふ。
雪崩は雪の状態や季節の如何によつて、いろ／＼と類別されるが、
何れにしても、アルペンの登山に際しても、或は春先に峠を越す時
にも、不斷に人を脅かす自然の威力である。故に山村の農夫は直
感的に雪崩に對して豫感を持つてゐて、雪の状態を見分けること
が巧である。又羚羊は決して雪崩の落下する道を横切ることが
無いといふし、山鴉は雪崩に先立つて里に降りてしまふともい
れてゐる。サンバーナード犬が、頸に葡萄酒の入つた小樽を提げ
て、雪崩に埋められた旅人を探して救出するのは、人の知る有名な話
である。山國の冬の夜長に、村老の語る雪崩の慘話や傳説は限り
が無い。だが、此のアルペンの懸崖に落下する雪崩の壯觀は、折あ
らば見逃してはならぬものである。

このやうに山村が、日毎雪崩の響に揺られてゐる時、下方の湖邊に
は、草は緑に、櫻や梨の花が咲亂れてゐる。その青い水晶のやうな
湖面に白鳥が逍遙してゐる。

純白の體、純白の頸をのして、白鳥が音をもたてずに小波を切つて
進めば、影を落した雪の山も歪んだり延びたりして形を崩す。牧
場から牛の鈴の音が漂ふ。野は既に燃えるやうな春だ。しかし
山村は、北面した高山のために日影を遮られてゐる。それでも、谷
の邊や南面した山麓には、プリムラ・シクラメン・雛菊・すみれをだま
き・アネモネ等の赤黄白の、彩り様々の草花が、目もさめるやうに鮮
かに咲誇る。山頂の春は、追はれ行く冬とだんだら織をなして躍
つてゐる。

(横有恒——山行)

横有恒
有名な登山家

四 櫻諍

アト
狂言で、シテ
の次の役者

主アト「これはこのあたりの者でござる。この頃はいづ方も花の盛りぢやと申す程に、花見に参りたう存ずれども、暇がなさに、参ることもえいたさぬ。最早暇になつてござる程に、今日は花見に参らうと存ずる。先づ太郎冠者を呼びいだし、申しつけう。」
「やい、太郎冠者あるか。」

シテ
能・狂言等で、
主となつてそ
の技を行ふ役
者

シテ
太郎冠者「はあ。アト、居たか。シテ、お前に居ります。」

アト「汝を呼出すこと、別のことではない。この頃は方々の花盛りぢやといへども、暇がなさに、花見に行くこともならなんだ。最早暇になつたほどに、花見に出でうと思ふが、何とあらうぞ。」

シテ「これは珍しいことを仰せられます。このごろは櫻の盛りぢやと申す程に、櫻を御覽ぜられるとあれば尤もでござるが、珍しからぬ。はなを御覽ぜられて、何にせらる。」
アト「いや、おのれは何事をいふ、櫻も花も同じことじや。」

シテ「これは頼うだ人とも覚えぬことを仰せらる。左様に仰せられたらば、人中で恥をかゝせらる、身共は苦しうござらぬが。」
アト「して、汝がその様にいふは仔細があるか。」

シテ「なか／＼仔細こそござれ。『はなが見させられたくば、私が『はな』を見させられい。他所へござるまでもござらぬ。』

アト「いや、おのれは言語道斷のことをいひ居る。おのれが面なは『鼻』といふ。『花』といふは別ぢや。」

シテ「さうではござらぬ。歌などにも櫻とは詠まれたれども、はなとは詠まれませぬ。」

アト「なか／＼でもないことをいひ居る。その歌を詠うて聞かせい。」

シテ「詠うて聞かせたらば、臆を潰させられう。」
アト「急いで詠め。」

櫻散る云々
拾遺集、紀貫
之の歌

行き暮れて
云々
平忠度の歌

櫻さく云々

新古今集、後
鳥羽院御製

吉野山云々
同上僧西行の
歌

櫻かざしの
云々

シ「心得ました。櫻散る木の下蔭は寒からで、空に知られぬ雪ぞ降りける。」これは何と。

ア「此方にも『花』といふ歌がある。」

シ「さらば詠うて聞かせられい。」

ア「行き暮れて木の下蔭を宿とせば、花や今宵のあるじならまし。」

シ「この方にもまだござる。『櫻さく遠山どりのしだり尾のながながし日もあかぬ色かな。』

ア「それなら此方にもある。『吉野山去年のしをりの道かへて、まだ見ぬ方の花を尋ねむ。』

シ「それなれば、こちらには謠にござる。」

ア「謠へ、聴かう。」

ウシ「櫻かざしの袖ふれて。」

今はさかがら
花も雪も、皆
白雲の上人の
櫻かざしの袖
ふれて、花見
車暮るゝより
月の花よ待た
うよ（謡曲小
唄）

資朝

藤原氏

仁和寺

山城國葛野郡
花園村、眞言
宗御室派の總
本山、俗稱御
室

ア「一段の謠謠ふ、致し様がござる。やい、太郎冠者、ウタヒ花見車暮るゝより、月の花よ待たうよ、月の花よ待たうよ。」
シ「はあ、これでつまりました。」
ア「總別何も知り居らいで、むざとしたことをいひ居つて某と競合ひ居る。彼方へうせい。」
シ「はあ。ア「ト「えい。」シ「はあ。」
（續狂言記に據る）

五 阿新丸 その一

日野中納言資朝の子息國光の中納言、その頃は阿新殿とて歳十三にておはしけるが、父の卿召人になり給ひしより、仁和寺邊に隠れて居られけるが、父誅せられ給ふべきよしを聞きて、今は何事にか命を惜しむべき。父と共に斬られて、冥途の旅の伴をもし、又最後の御有様をも見奉るべし。とて母に御暇をぞ乞はれける。

母御頻りに諫めて、佐渡とやらんは、人も通はぬ怖ろしき島とこそ聞ゆれ。日數を経る道なれば、いかんとしてか下るべき。その上汝にさへ離れては、一日片時も命存ふべしとも覺えず。」と、泣悲しみて止めければ、よしや伴なひ行く人なくば、如何なる淵瀬にも身を投げて死なん。」と申しける間、母痛く止めば、又目の前に憂き別もありぬべしと思ひ侘びて、力なく、今まで唯一人附添ひたる中間を相添へられて、遙々と佐渡國へぞ下されける。路遠けれども、乗るべき馬もなかりければ、はきも習はぬ草鞋に、菅の小笠を傾けて、露分けわぶる越路の旅、思ひやるこそ哀れなれ。

都を出でて十日あまりと申すに、越前の敦賀の津に着きにけり。これより商人船に乗りて、程なく佐渡國へぞ着きにける。人してかうといふべき便もなければ、自ら本間が館に至りて中門の前にぞ立ちたりける。折節僧のありけるが立出でて、「この内への御用

にて御立ち候か。また如何なる用にて候ぞ。」と問ひければ、阿新殿「これは日野中納言の一子にて候が、『近頃斬られさせ給ふべし。』と承りて、その最後の様をも見候はんために、都より遙々と尋ね下りて候。」といひもあへず、涙をはらくと流しければ、この僧心ありける人なりければ、急ぎこのよしを本間に語るに、本間も岩木ならねば、さすが哀れにや思ひけん、聽てこの僧を以て持佛堂へいざなひ入れて、踏皮行纏脱がせ、足洗ひて、おろそかならぬ體にてぞ置きたりける。

阿新殿これをうれしと思ふにつけても、同じくは父の卿を疾く見奉らばや。」といひけれども、今日明日斬らるべき人にこれを見せては、なか／＼黄泉路の障ともなりぬべし、また關東の聞えも如何あらんぞらんとて、父子の對面を許さず。四五町隔たりたる處に置きたれば、父の卿はこれを聞きて、行方も知らぬ都に、如何あらんと

思ひやるよりもなほ悲し。子はその方を見やりて、浪路遙かに隔たりし鄙の住居を思ひやりて、心苦しく思ひつる涙は更に數ならずと、袂の乾く隙もなし。これこそ中納言のおはします牢の中よとて見やれば、竹の一叢茂りたる處に、堀廻らし、塀塗りて、行通ふ人も稀なり。なさけなの本間が心や。父は禁籠せられ、子はいまだをさなし。縦令一所に置きたりとも、何程の怖れかあるべきに、對面をだに許さず、まだ同じ世の中ながら、生を隔てたる如くにて、なからん後の苔の下、思ひ寝に見ん夢ならでは、相見んこともありがたしと、互に悲しむ恩愛の父子の道こそ哀れなれ。

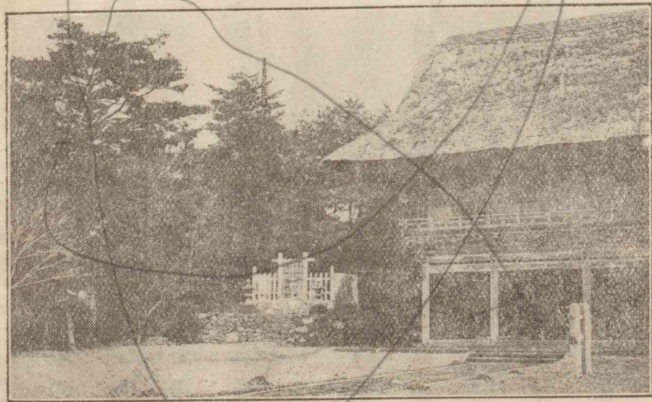
五月二十九日の暮程に、資朝卿を牢より出だし奉りて、遙かに御湯も召され候はぬに、御行水候へ。」と申せば、早斬らるべき時になりにけりと思ひ給ひて、嗚呼、うたてしきことかな。我が最後の様を見んために、遙々と訪ね下りたる幼きものを、一目も見ずして果てぬ

五月二十九日
元弘二年

ることよ。とばかり宣ひて、その後は曾て諸事につきて言葉をも出

だし給はず。今朝までは氣色しをれて、常には涙を押拭ひけるが、人間のこゝとに於ては、頭燃を拂ふ如くになりぬと覺りて、只綿密の工夫の外は、餘念ありとも見え給はず。夜に入れば、輿さし寄せて載せ奉り、こゝより十町ばかりある河原へ出だし奉り、輿舁きすゑたれば、少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直りて、辭世の頌を書きたまふ。

日野資朝の墓



五蘊 色・受・想・行・識
四大 地・水・火・風

五蘊假成形
將首當白刃

四大今歸空
截斷一陣風

五 阿新丸 その一

三七

年號月日の下に名字を書きつけて、筆を擱き給へば、斬手後へ廻るとぞ見えし、御首は敷皮の上に落ちて、體は猶坐せるが如し。この非常に法談なんどし給ひける僧來て、葬禮形の如くとり營み、空しく倒れ伏し、今生の對面遂に叶はずして、變れる白骨を見ることよ。」と、泣悲しむもことわりなり。

六 阿新丸 その二

阿新未だ幼稚なれども、けなげなる所存ありければ、父の遺骨をば、唯一人召使ひける中間に持たせて、まづ我よりさきに高野山に參院とかやに納めよ。」とて、都へ歸しのぼせ、我が身は勞ることよしにて、なほ本間が館にぞとまりける。これは、本間が情なく父を今生にて我に見せざりつる鬱憤を散ぜんと思ふゆゑ

高野山
紀伊國伊都郡
奥の院
高野山上の部

なり。

四五日經ける程に、阿新晝は病のよしにてひねもすに臥し、びやかにぬけ出でて、本間が寢處なんど細々と覗ひて、隙あらはかの入道父子が間に一人さし殺して、腹切らんずるものをと、思ひ定めてぞねらひける。

或夜雨風烈しく吹きて、宿直する郎等ども皆遠侍に臥したりければ、今こそ待つところの幸よと思ひて、本間が寢處の方を忍びて覗ふに、本間が運やつよかりけん、今夜は常の寢處を變へて、いづくにありとも見えず。又二間なる處に燈の見えけるを、こは若し本間入道の子息にてやあらん、それなりとも討ちて恨を散ぜん、とぬけてこれを見るに、それさへこゝにはなくして、中納言を斬り奉りし本間三郎といふ者ぞ唯一人臥したりける。よしや、これも時にとりては親の敵なり、山城入道に劣るまじと思ひて、走り懸から

んとするに、我は元來太刀も刀も持たず、只人の太刀を我が物と憑みたるに、燈殊に明かなれば、立寄りば、やがて驚き合ふことやあらんずらんと危みて、左右なく寄り得ず、如何せんと案じわづらひて立ちたるに、折節夏なれば、燈の影を見て、蛾といふ蟲の數多明障子に取りつきたるを、すはや、究竟の事こそあれと思ひて、障子を少し引きあけたれば、この蟲數多内へ入りて、やがて燈を打消しぬ。今はかうと嬉しくて、本間三郎が枕に立寄りて探るに、太刀も刀も枕にありて、主はいたく寝入りたり。まづ刀を取りて腰にさし、太刀を抜きて胸元にさし當てて、寝たる者を殺すは死人を刺すに同じ、驚かさんと思ひて、先づ足にて枕をはたとぞ蹴たりける。蹴られて驚く所を、一の刀に臍の上を疊までつと突通し、返す太刀に喉笛をさし切りて、心のどかに後の竹原の中へぞ隠れける。本間三郎が一の太刀に胸を通されて、あつ。といふ聲に、番衆ども驚

き騒ぎて、火を點してこれを見るに、血のつきたるちひさき足跡あり。さては阿新殿の仕業なり。堀の水深ければ、木戸より外へはよも出でじ。探し出だして打殺せ。とて、手にく、松明を點し、木の下、草の蔭まで、残る所なくぞ探しける。阿新は竹原の中に隠れながら、今はいづくへか遁るべき、人手にかゝらんよりは、自害をせばやと思はれるが、憎しと思ふ親の敵をば討ちつ、今はいかにもして命を全うして、君の御用にもたち、父の素意をも達したらんこそ忠臣、孝子の義にてもあらんずれ、若しやと一まづ落ちて見ばやと思ひ返して、堀を飛越えんとしけるが、口二丈、深さ一丈に餘りたる堀なれば、越ゆべき様もなかりけり。さらばこれを橋にして渡らんよと思ひて、堀の上に末靡きたる吳竹の梢へさらくと登りたれば、竹の末堀の向ひへ靡き伏してやすくと堀をば越えてけり。夜は未だ深し、湊の方へ行き、船に乗りてこそ陸へは着かめと思

ひて、たどるく、浦の方へ行く程に、夜もはや次第にあけ離れて、忍ぶべき道もなければ、身を隠さんとて日を暮し、麻や蓬の茂りたる中に隠れ居たれば、追手どもと覺しき者どもも百四五十騎馳散りて、若し十二三ばかりなる兒や通りつる。と道に行合ふ人毎に問ふ音してぞ過ぎゆきける。

阿新その日は麻の中に、孝行の志を感じて、佛神擁護の眸マナツメをや廻らされけん、年老いたる



阿新丸の隠れ松

山伏一人に行合ひたり。この兒のありさまを見て、痛はしく思ひけん、これはいづくよりいづくをさして御渡り候ふぞ。と問ひければ、阿新事の様をありの儘にぞ語りける。山伏これを聞きて、この人を助けずば、只今の程にかはゆき目を見るべしと思ひければ、御心安く思し召され候へ。湊に商人船ども多く候へば、乗せ奉りて、越後越中の方まで送りつけ参らすべし。といひて、足たゆめば、この兒を肩に乗せ背に負ひて、程なく湊にぞ行きつきける。(太平記)

七 五月雨の詩趣

雨は通例厭なものになつてゐるが、反對にまた詩趣に富んで、風情の多いものともなつてゐる。ことに春雨は艶なものに數へられるし、その他も、夕立といひ、時雨といひ、村雨といひ、冬の氷雨、秋の長雨おのゝ風情があるが、就中五月雨は、雨百態の中でも深刻な味

太平記
花園天皇から
後村上天皇ま
での五十四年
間の戦亂を記
したもので、小
鳥法師の作と
つたへる

芭蕉

元祿時代の有名な俳人。姓は松尾名は桃青

がある。

私は五月雨の厭はしさを思つて、どうしてあの時期をすごさうかと考へる度毎に、人力で何ともしがたいこの自然の襲來に對して、たゞ消極的の諦めの中に、一脈の畫趣と詩趣とを思念して、森羅萬象をすつかり詩化してゆく俳人の自然觀に學ぶところが多い。

五月雨には名句がなかくに多い。芭蕉の

五月雨の降りのかしてや光堂

といへば、自然に對し歴史に對して、悲しい諦め中にも無限の詩趣がある。

さみだれを集めて早し最上川

の句を味ふと、豪宕たる長江大河が、五月雨の濁水に水嵩を増して、滔々と流れてゆく壯觀が眼に浮ぶ。また不玉といふ人の句に、

白鷺や青くもならずつゆの中

不玉

元祿頃の俳人。姓は伊藤

野坡

芭蕉の弟子。姓は竹田

といふのがある。この句は面白い。毎日々々ふりつゞく五月雨に、池の水際の蘆の葉は伸びて濃く茂り、その色は融けて流れんばかりだ。側に立つて餌を漁つてゐる白鷺も、爲に青く染まりさうであるが、さて染まらないのが不思議である。又、野坡の句に、

さみだれに小鮒を握る子供かな

といふ鄙びた句がある。この句を思ふと、自分の聯想は自然にわが幼時に返つて來る。田舎では麥の黄熟する頃で、つゞいて田植も水嵩がまさつて、田園の小溝にも水がどぶくと溢れる。さういふ時に、どうかすると大きな鮒が、戸惑をして水田の縁の畦道の水溜にも遊びあがつて、水の退いた後に取残されてびちややく跳ねる。それを見付けて握りしめた時のうれしさは忘れられぬ。五月雨の詩趣は既に水である。水に臨んだ處にその詩趣は一層

桃隣 芭蕉の弟子、姓は天野
 淀川 近畿地方の中、大阪を西南流し、分岐して大阪灣に注ぐ
 大和川 大和から出て、西流し攝津、和泉の國境を流れ大阪灣に注ぐ
 淀 京都の南三里餘にある町
 八幡 淀町の南一里ほどの處にある町、淀川の本流と木津川の間にある
 宇治 京都の南四里半にある町、宇治川にのぞむ
 嵐山 京都の西北にある勝地
 石山 近江の琵琶湖畔にある名所

よく現れる。桃隣の句に、
 五月雨の色や淀川大和川
 といふのがある。格別よい句とも思へぬが、水郷の五月雨の色が思はれる。山城と攝津との間にある淀八幡あたりも、一つの水郷である。
 京都の近郊には新緑を見るによい處が多い。宇治嵐山石山などがさうである。新緑は晴に好いのみならず、雨にもよい。これ等の場所は五月闇に螢を眺めるに有名であるが、私は平田渺々たる南山城の水郷に、何となく五月雨の趣味を覺える。そこは木津川が平野の東南から流れて来て宇治川に合流する。加茂川と桂川とが伏見の西方で落合つて、それが又淀に来て宇治川に注ぎ入る。これ等の四つの河水が溢れ濺んで附近の低地を浸してゐる。河の岸には青蘆が人の丈よりも長く伸びてゐる。淀には今でも舊

木津川 淀川の一、大支なが瀬、沿岸に月名所がある
 宇治川 山城の南方を流れる川、桂川と合して淀川となる
 加茂川 京都の東部を貫流し、西に折れて下鳥羽村に入る
 桂川 保津川の下流、嵐山の下を流れるあたりを稱する

城趾があつて、高い石垣の上には、老松が翠蓋を翳してゐるのが電車の窓からも見えてゐる。埋め残された城の堀には、睡蓮や蓮が浮いてゐる。私はいつぞや、五月雨の濛々と降りこめてゐる時、そこを通りながら、電車の窓から覗いて見て、何ともいへない哀愁を覺えたことがあつた。
 八幡には、木津川が宇治川に落合ふ少し上流の處に長い板橋が架つてゐる。木津川は川底に沙の多い、清い感じのする川である。私は水の形では川を好む。そして如何なる川も好むが、木津川は最も好む河流の一つである。いつもそのあたりを電車で往來しながら、遠く木津の長江に架した板橋を眺めて通り、いつか一度その板橋を渡つてみたと思つてゐた。すると丁度ある五月雨頃のことであつた。八幡に居る知人を訪ねて夜になつた。折から五月雨の晴れまに月が上つたので、俄に興を催して、かねて渡つて

吉野川

紀の川の上流

月の瀬

大和、伊賀、山城の三國の交界に近く木津川の流に沿ふ梅花の名所

多摩川

甲斐を出て武蔵を流れる川末を六郷川といふ

荒川

隅田川の上流の稱

市川

下総東葛飾郡に在る町

江戸川

利根の分流

鴻の臺

今は市川町の大字となる。江戸川東岸の丘陵

丘陵

見たいと思つた木津川の堤に出て、板橋を向ふに渡つた。今日では吉野川の柳の渡にもコンクリートの橋が架り、南畫趣味の月の瀬の梅溪でさへも、コンクリートの洋風の橋が架つてゐる時代に、木津川の橋は依然として昔ながらの板橋であるのは嬉しい。少くとも風雅の立場からいふと嬉しい。私は知人と共に五月の空に月を仰いで、白く月光に輝いてゐる長江を眺めながら、幾度もこの板橋を往き返りして見た。
東京の近郊の、武藏野の野趣に富んだ所は、京都の近郊に劣らず、新緑の景も、五月雨の頃の趣も美しい。それは多摩川の沿岸にいつて見てもいゝし、荒川の方に出てもよい。又市川の傍を流れる江戸川に行つて鴻の臺の鬱林を眺めるのもいゝが、東京市のやうな樹木の多い都會では、その中に居ても濃緑の美を楽しむことには不自由しない。

關口の大瀧

神田上水の堀を二派に分け、その一を江戸川へそそぎ落したものを目白臺

目白臺

後に雑司が谷前に江戸川を控へた高臺

植物園

東京帝國大學

附屬

離宮

赤坂離宮

ある五月雨あがりの午後、牛込の方から小石川の關口の大瀧の方に歩いて來ると、目白臺から雑司ヶ谷の方の丘陵は濃い緑の葉がもくもくと茂つて、その樹頂のあたりには薄墨を流したやうな夕立雲が低く垂れてゐた。早稲田の田圃には頻に雨を呼ぶ蛙の聲が聞える。今にも降つて來さうな只ならぬ空模様だつた。その空模様と濃緑の森との色彩の配合は、五月雨の季節には至る處に見る景色だつた。不忍池畔から上野の森を眺めた時に、その頂邊にもものゝしい黒雲の附いてゐるのを見ることがあらう。小石川の久堅町あたりから植物園の森を眺めた時に、一幅の水墨の風景畫に接することもあらう。赤坂の溜池あたりに住む人々は離宮の森の上に低い物凄しい雲が見られる。さういふ空と森との配合を成した時、森の色は、青く晴れた日の太陽の光を浴びてゐる時よりも、一層鮮かにその薄墨色の空に浮出して見えるものである。

私はそんな時の重くるしい、惱しげな水墨畫風の光景に興を感じずる。そして、そんな空模様の中には、よく燕が嬉々として空を舞ひ飛んだものであるが、近頃東京に居ては殆ど燕の影を認めなくなつた。

その燕で思ひ出すのは、燕と雲雀の事である。先頃暫く田舎に住つてゐる間にも、雲雀は、晴雨にかゝはらず高い空で歌つて居るのを、私は春眠を貪りながら、めづらしく聽いてゐた。しかしその雲雀も田舎でさへひどく減じたやうに思ふ。燕は田舎で田植の頃そこら中を翔つてゐたものであるが、今はそれも少なくなつたのであらう。嘗て、十年も前に、大和の薬師寺へ行く田圃道で、燕が私の車に乗つて行く先を、地べたに腹をつけるやうに低く飛んで行くのを見て、忽ち燕村の句を思ひ浮べた。

大和路の宮も藁屋も乙鳥かな

薬師寺 大和國生駒郡
都跡村大字西
の京にある寺
燕村 天明期の有名
な俳人、姓は
谷口

近松秋江
文士。評論家

とは、よく眞を穿つてゐる。その乙鳥の影すら東京近郊では見られない。大和路には今でも尙燕村の句の如くてあらうか。

(近松秋江——中央公論)

八 詩二篇

一 新詠

鐘の聲ゆるく鳴りひびく

かゝる波の波方ふは

善い波の光たふひたり

木の石には夕暮ひそみ やはらぐ色を浮びたれ

虫はささよみみのかたが 波の女の上に霞ひかり

神の御心に

近松秋江

かゝも静寂に祈をば
なほつとく美しきなまんとす

田舎の音はゆきかき

五月の夜は今か来ん

小徑は雪にかえれたり

眠れる田舎の音はすべて静まりて

祈る心はやはらかき涙の衣ふつと来ん

あゝ鐘の音はゆるくなりひびきあ

その聲はあふりて落ち

控の音は木葉にゆらぐ

白へる雪よ小鳥らは

十字となりて飛び

やぐらき銀の陰影は消えんとす

夕はいつこへり

(三木露風—象徴詩集)

三木露風
現代の詩人。
羅風と改號す

二 霧ふる宵

ひやくくと霧ふる宵の

街の樹と遠のく姿

家と家けるかよ對ふ

あふやかり青き葉ふるふ

街乃灯の疲れ——かき手に

消ゆる人ありはる人

君もくもる文字の形も

色どりとあり此もや思ふ

すか——見る闇の深きに

青きは波方よ沈えそ

大都會もの輕やうに

薄霧の底よ沈くぬ

わが念たり——かふ^ここ^ここ^こ

浮城は今やふひろけ

霧の海からけりぬ

(河井醉茗——醉茗詩集)

河井醉茗
現代の詩人

九 子雀と親鳥

引越をする毎に、雀はどうしたらう。と祖母がつぶやいたのを覚えてゐる。もう八十幾つで、耳が遠かつた。その遠い耳をちつと澄ますやうにして、目をうつとりと窓へ向けて、火桶の傍にちよこん

ボクセ4250010

と小さく居て、雀はどうしたらうの。」といふ。

「祖母さん、一所に越して來ますよ。」といふ。
當ずつぼの氣休めを言ふと、

「お、さうかの。」

と目皺を深くして、ほく／＼と頷いた。

晴れて雀の
云々
元日や晴れて
雀のものがた
り服部 雪

祖母は、いつも佛前の御飯の残だの、洗ひ流しの御飯粒だのを小窓に載せて、雀を可愛がつて居たのである。私たちは——晴れて雀の物がたり——の句は知つて居ても、この祖母のやうに、今朝も囀つた。と心に留めるほどではなかつた。が、少からず雀に愛着の念を生じたのは、麴町の土手三番町に住つた頃であつた。

春も深く、やがて梅雨に近かつた。庭に柿の老樹が一株。やり放して手入れをしない根まはりや、雑草の生えた飛石の上を、ちよこちよここと雀が一羽、羽を廣げながら歩いてゐた。妻が、確かに子雀

と見たか、つか／＼と裸足で下りた。チチチチ、チュ、チュツと啼く。もう手の中にあつた。「引摺んぢや、いけない。そつと／＼。」と思はずいつたが、相手が糊をなめる代物なので、臺所の目筈で南の縁へ先づ伏せた。處で生捕つて籠に入れて見ると、一時もたゞない中に、すぐに薩摩芋を突ついたり柿を吸つたりする目白のやうな人馴れはない。雀の兒は容易に餌につかぬと祖母にもきいてゐたから、まだ飛べもしないひよわな子雀を餓死させてはならないと、もとの飛石の上に伏せ直した。きつと親雀が來て餌をかふであらうと思つたのである。

親鳥は直に來て飛びついた。もうさつきから庭樹の間を、けたましましく鳴きながら、あちらへ飛び、こちらへ飛びして騒いでゐたのである。

障子を開けたまゝ、覗いて居るのに、子の可愛さには、邪慳な人間

に對しての恐怖も忘れて、目筈の周圍を、二三尺はらくと狂つて飛ぶ。つゝと、^箒の目に嘴を入れたり、さつと引いて横に飛んだり、飛びながら上へ舞立つたり、そのたびに中の子雀の憧れやうといつたらぬ。聲がきいと聞えるばかりに鳴きすがつて、引切れさうに胸毛を慄はして、利かぬ羽を渦にして抱きつかうとするのは、親鳥が嘴を筈の目につゝと入れては、ついと引く時である。見ると、小さな餌を、虫らしい餌を、親鳥は嘴にくはへて居るのである。筈の中のは、まだ乳離れせぬ赤兒なのだ。火のつくやうに鳴立てるのも道理である。

處で、筈の目から嘴へと、^咄めるのは、いと易しい。であるのに、餌を見せながら、鳴叫んでは、身を引いて飛廻るのは、あまり利口でない人間にも解つた。「坊やお出で。其處を出てお出で。」と言ふのである。人の手に封じられた子雀が、どうして筈から脱出られよう。

親はどうしてその筈をあけられよう。その思はどうであらう。私たちはしみじみ、いとしく可愛くなつた。石も、折箱の蓋も、勿飛ばして筈をあけた。「御免よ。御免なさいよ。」と、悄氣て座敷に引込んだのである。きまりが悪くて、しばらくは背戸に顔も出さなかつた。庭下駄を揃へてあるほどの所帯ではない。晩方、玄關の下駄を引捉んで背戸へ出て、柿の梢の一つ星を見ながら、あの雀はどうしたらう。とありたけの飛石をそゞろに渡ると、濕けた窪地で、すぐ上は忍草や龍の鬚の石垣の崖になつてゐる。片隅に山吹があり、こんもりしてつゝ、じが並んで植はつて居るが、垣どりの灯がちらくと透くほどに茂つて、蔭も深くはないその低い枝に、雀が一羽たよりなげに宿つてゐた。さつきの子雀に違ひない。地上から二尺ばかりより立てないので、母鳥はそこにやむなく預けて行つたものらしい。悪戯をわびた私たちの心を汲んだ親雀の氣

筑士の森
東京牛込區

の優しさ。その親たちの噂はどこであらう。この子雀の寂しさうな。土手の松へは梟が来る。筑士の森では木菟が鳴く。折からの宵月に、親鳥は恐しいものの眼に觸れないやうにと、なるたけ葉の暗い中に隠したに違ひない。「一寸來て御覽。」と妻を呼出して、兩方から顔を寄せると、微かに黄色な嘴を傾けた。その柔かな胸毛の色は、さし覗いたもの、襟よりも白かつた。朝寢はする。物に紛れて忘れる。ふと氣がつくと晝の庭に、隈なき五月の日の光を浴びて、黄金の如く、銀の如く、飛石の上から、柿の幹やつゝ、山吹の上下を、二羽の雀が縦横に飛んでゐる。ひらく、さらく、と羽が輝いて、三寸、五寸、一尺、二尺、草木の陰ののびると共に、親雀につれて子雀の翼は、次第に、上へ上へと自由に軽く、卯の花の垣も越して、見てゐる中に、崖をなゝめに、上町の樹の茂みの中へ飛んで見えなくなつてしまつた。

眞綿を黄に染めたやうな、あの翼が、かうも速く飛ぶのに馴れるものか。感に入りながら私たちは眺めた。(泉鏡花氏の文による)

一〇 子供の國

小供がしようときさへ望むなら、今の今だつて、天に翔つてのぼることが出来る。

タゴール
印度の哲學者
詩人。現存

これは詩人タゴールの詩の句の一節である。まさしく子供は羽根の無い天使である。地上に住むから、羽根を天へ置いて來たまでである。だから生れて間もない頃から、この天使は誰の前でもかまはずに、遠慮なく大膽に愛を説いて居る。だが、この天使は、言葉でない言葉で語るのだ。手足で語り、眼で語り、泣くことに依つて、笑ふことに依つて、雄辯に語るのである。全身を投出して語るのだ。私どもはこの天使の言葉に耳を傾けな

くはならない。こゝていふ耳とは、勿論普通の耳ではない、心の耳である。耳でない耳で聞かなくては、その意味を汲みとることは出来ない。

しかしこれはなかく、むづかしいことだ。けれどもこの天使が一年二年と年を重ねて、三歳ぐらゐになつてからは、どうやら私どもにも、間違はずにその意味を汲むことが出来るやうだ。

彼等は鉛筆で、紙の上になにか書きはじめ、おぼえた言葉で、片言まじりに何かうたひはじめ。また思ひくゝの動作がはじまる。私どもはそれからいろくゝのものを教へられる。殊に愛について教へられることが多い。

かうした子供の心の表現は、あくまで藝術である。羽根を持たぬこの天使は、その藝術中（その心の中）で水のやうに、風のやうに、また光のやうに自由に飛びめぐつてゐる。

彼等は紙の上に、形のくづれた丸を書いて、おてんとさまだといふ。頭へすぐに手や足をつけて、お母さまだといふ。もちやくゝを書いて「土だといふ。しかしその一つくゝに彼等の眼は輝く。一本の線も彼等には無意味に働くことがない。

世界はすべて子供らのために存在するのだ。おてんとさまを見つけた時、それは一人のお友達を見つけたのである。お月様も彼等のすなほな遊び相手である。子供らはお星様を手につかむ。風と一緒に寢床に寐る。彼等は小さいが堂々たる主人だ。いつも自分自身を世界のまんやかに坐らして威張つてゐる。

彼等はおてんとさまにも話しかける。流から唄をならふ。犬や猫といろくゝの話をする。それが返事をしてくれずとも、子供らには十分にわかる。それは自分の心を、すべてのものの上に與へるからだ。こんな深い愛の心があらうか。

まことに彼等は、泉のやうに盡きない愛を、その胸に持つてゐるのである。

坐蒲團を背中にくゝりつければ、それでもう彼等にはほんとの赤ちやんである。土の人形をふと取落す。「おゝ、痛いでちよ。」とやさしく抱へあげる。私どもには耳に入らぬ泣聲が、その土の人形の動かぬ唇から洩れて聞えるからである。一本の汚ない竹切は、銀の光つた杖となり、怖ろしい劔となる。また高いく煙突とも見える。子供は何といふ自在な世界に住んでゐることであらう。

浦島太郎の話、リップ、バン、ウインクルの話、このやうなお話の主人公が、自分のごく短い日を送つたつもりなのに、何十年といふ年月が経つてゐたといふのは、一體どういふことなのであらうか。この頃になつて、私はかう考へる。それは、子供の世界、子供の國に遊んだことを、もしかしたら表はしてゐるのかも知れないと。

リップ、バン、ウインクルの話
アメリカの傳説
アーペンゲのスケッチブックの中に記されてある

つまり、子供の國に遊んでゐられるものは、いつまでも年をとらないのである。子供のやうな無邪氣な敏感な心で、興味深く日を送ることは、決して年をとらぬことなのである。そして私はどうかして、かうした境地に、言ひかへればかうした子供の國に、ぜひとも立歸りたいものだ。出来るならば浦島太郎のやうに、この安らかな數日を送つて、長い年月を過したいとまで考へる。折々でもよい、この見知らぬ子供の國へ、或は忘れはてた子供の國へ、やすくと踏みこんでいかれる心だけを残して置きたいと思ふ。

(水谷まざる——夢と影)

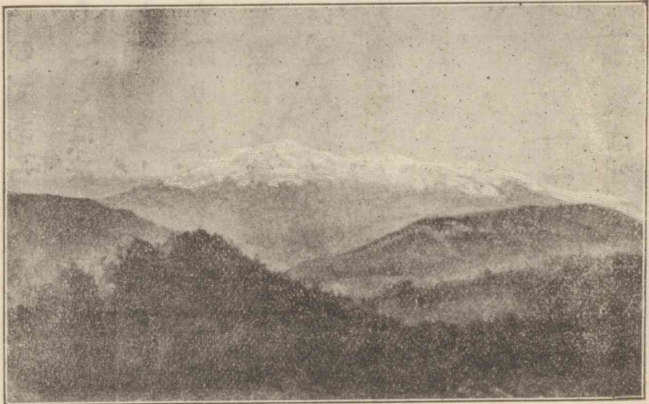
水谷まざる
名は勝 現代の文士

御嶽山

信濃木曾谷と飛騨國とに跨る。海拔九八四一尺

一一 御嶽山頂の雲

雲の翼は、初は徐々として遠山を覆ふやうにして、擴がつて來たかと思つてゐると、忽ちに谿からの怖ろしい風が、一陣どつとばかり



に、絶頂の劍が峰の岩角に突當つて來た。小石ががら／＼音を立
 てて、深い谿底へ落ちて行くと、岩の間に隠れてゐた雷鳥が、すつと風の前に
 突切つて飛んだ。雲は此の不意打の風に、一層低く／＼ひらつくやうにし
 て、隙があらば此の劍が峰の絶頂を襲つて來ようと待構へてゐるやうに、岩
 角岩角に腹をすらせて這ひよつて來る。黙々たる其の襲來の姿！瞬間
 前に見えてゐた、つい近く地獄谿を隔てた岩角も、既に其の雲軍の包み隠す
 所となつてしまつた。右手に稍、遠く黒い水を光らせてゐた二つの池の上にも、上から逆落しに攻落ち

て來る不思議な雲の手が、もうその水の面まで縦横に伸びて來た。四方から攻寄せ攻寄せて來る雲の軍勢！その中を事々しく、物に取りつかれたやうになつて、行者等の鈴の音が響き渡る。呪文と鈴の音と、此處に一團彼處に一團、白衣の行者どもは集り集つて、襲ひ來る雲の軍勢を拂ひ除けようとする如く、聲を限りに呼立てて居る。

が、無言の雲軍は、岩を埋め谿を覆ひ、一步々々地を占めて、刻々に進んで來る。また一陣、風が吹起ると、雲の先頭はやゝ亂れて、右往左往に頭を振つて迷ひ出すが、その風が吹過ぎたあとからは、時々前よりは一層勢ひ鋭く、稀薄な空氣を突裂いて、一氣に攻寄せて來る。偏に山の背後からばかり攻めてゐた雲は、いつか前面に廻つて、這松の上を滑り、砂礫の上を包み、うね／＼と一列を作つて、下から登つて來る道者の姿を、其のうちに隠見させて、絶頂目がけて攻上つ

て来る。風は初め谿から谿へと吹入つて、絶頂から少し下を山をめぐつて吹いてゐたのが、今は雲の上を壓して、絶頂より遙か遠く、直ちに高い天空へ吹去つて行く。その風の下を雲は這ひつ滑りつ押寄せて、今ではたゞ劍が峰の頂上の一角、社の立つ一團の岩を残すばかり、全山たゞ雲を以て包んでしまつた。遠巒も見えず、空も見えず、日も見えず、其の雲の中を、陰にこもつた呪文の聲と、澄んだ鈴の音とがひゞいてゐるばかり、さあつくくと鳴る風の音、雲を吹きやぶり岩角を突きくづさうとする冷たい風の音、今はたゞ天地は一帶に雲の鋭鋒、その中に包まれた小さな人の聲も鈴の響も風の音も、何ともする事が出来ない。得意な雲は總べてを覆ひ包んで、草も、木も、石も、岩も、風までも人までも、有らゆる生物を自由の翼の下に壓へて、いつまでもその儘に續けて行きさうに見えるが、風の音は次第に強くなつて來た。上から押へようとする雲の厚

袞と争つて、跳除け突破り、再び自在な自己の天地を見出さうとする様に、風は勢ひ猛に吹起つて來る。風と雲との烈しい争、人は其の中に包まれて、岩角にすがり木蔭にひそみ、纔かに呼吸を繋いでゐるばかり、危く吹飛ばされ雲に巻かれて、千丈の谿底へまろびさうになる。と、その中に、雲の軍勢の一端がはしなく突破られた。伏してゐた風の力は、此の時全體を一つところに集めてどつと吹出る。雲は惶て、上から押しつぶせようとするが及ばない。風は益、力を得て、その雲の破目から吹いて吹捲くる。一軍が破れると、後からく一軍々々と攻寄せくて來るが、風は愈、強く、上に下に遠く近く、天上までも谿底までも、荒れまはり狂ひ廻つて、雲の軍を吹散らさうとする。日は此の時風に力を得て、さあつと鋭い光を上から投掛ける。光は澄んで青白く、純白な雲の頂は、一様に目醒めたものの如く、頭を上げてその光を仰ぐ。人は其の雲

の中から吐息をつきながら、仰いて此の光を吸込まうとする。日のある周囲、天上は紫に輝いて、その氣高い光は瞬時下界の烈しい争闘の何物をも忘れしめる。

紫の空は次第にその領土を擴げて行く。日の光は次第に強く、白雲は随つて長く伸びて、天の裾遠く、一帯の山の頂が浮ぶやうにあらはれて来る。風はまた一しきり勝者の聲をあげて鳴渡る。山上の雲は、今、しばし姿を亂して西方に散るが、直ちに陣を整へて、また絶頂目がけて攻上る。かくてまた果てしなき風と雲とのあらし、その中を呪文の聲を張りあげ鈴を鳴らして、人ははね飛ばされまいと這ひまはつてゐる。

(吉江孤雁)

吉江孤雁
名は喬松。文學者

大山
相模國中郡にある、海拔四一、二五尺

一一 太田道灌

明治四十四年の夏われ大山オホヤマに登りて、脚下に關八州を望み、下りて

太田道灌の墓
洞昌院内にある

山麓の上粕屋村に、太田道灌の墓を訪ふ。嗚呼、道灌は四百年の昔八州の野に騁馳したりし英雄なり。然るに今や彼何處にかある、五輪の小塔古びて苔を帯びたり。墓前の二大老松は、何人の手向けしものによ。

太田道灌と云へば、何人も江戸城を連想するなるべし。江戸城今や皇居となれり。皇居となるの前三百年の間は、徳川幕府の在りし處なり。而して之を創めたるは太田道灌なり。

わが庵は松原つゞき海近く

富士の高根を軒端にぞ見る

徳川幕府以後こそ、江戸城は海より遠ざかりたれ、道灌の頃には海に接したりき。我が國の城と云へば、必ず山城なりしに、平地の城而も海に接したる城、而も富士の高根を軒端に見る城、これ當時にありては實に破天荒なり。

詩 孤鞍云々の
大槻清崇の詠

孤鞍衝雨入茅茨
少女不言花不語
少女爲贈花一枝
英雄心緒亂如絲



太田道灌像

これ道灌の故事を詠じたるものとして、頗る人口に膾炙す。道灌曾て獵して雨に逢ひ、農家に就いて蓑を借らんことを乞ふ。少女いで來り、山吹を呈したるだけにて、何とも言はず。道灌空しく歸り來りて、左右の人々に此の事を話せば、そは古

七重八重の歌
後拾遺集、兼明親王の詠、第五句は「無きぞあやし」とある

歌に、

七重八重花は咲けども山吹のみ
の 一つだに無きぞ悲しき

資清 扇谷上杉氏の臣、源頼政の裔資房の子、和歌連歌を好む。明應二年歿、八十三歳
小机城 武藏橋樹郡小机村にある。小田原北條氏の家人笠原氏の居城

藤澤の役 藤澤は武藏大甲郡人見原、この戦役は康正元年(一一一五)冬の事

とある心ならん。とありければ、道灌さてはと悟り、これより和歌を學び始めたりと云ひ傳ふ。されどこれ一種の傳説に過ぎず。道灌の父資清は文武の達人なり。殊に和歌を善くしたり。道灌も父の教を受けて、幼時より和歌を學びたるなり。道灌曾て小机城を攻む。敵は大勢にして、味方は小勢なり。衆皆其の勝算なきを云ふ。道灌曰く、善く兵を用ふるものは兵の多少に由らず。勢に乗ずるに如かず。とて、

小机は先づ手習の始にて

いろはにほへとちりくくなる

といふ狂歌を作りて一軍を勵まし、果して城を陥るゝを得たり。藤澤の役、大いに上杉憲直の兵を破れり。我が將中村重頼、敵の一將と闘ひ、その首を獲て歸る。年いまだ弱冠ならず。艶麗雅美鬢髮馥郁たり。道灌哀惜に堪へず、

上杉憲直
或は憲定といふ。傳記不詳

中村重頼
もと京家の人。上杉氏に身を寄せた

上杉定正
扇谷上杉。明應二年山内上杉顯定と戦つて死んだ。五十二歳

應南城
長生郡。三河入道武田信長。茲に城き、徳川氏の初世に至る

歌
作者不詳。下句或は一鳴く音に湖の満干をぞ知る」ともいふ

義政
足利第八代將軍。延徳二年薨す。六十四歳

かゝる時さこそ命の惜しからめ
かねてなき身と思ひ知らずば

重頼も之に和して、

なき身とは誰も知れども諸共に

いまはに及ぶことをしぞ思ふ

上杉定正、上總の應南城を攻む。夜、海崖を過ぐ。敵、石弩を崖下に設けて之に備ふ。定正騎を駐め、人をして潮の満干を視しむ。衆疑懼して進まず。道灌請ひて赴き、幾くもなく歸り報じて、曰く、潮干たり、軍を行るを勞せず。」と定正その故を問ふ。道灌曰く、古歌に、遠くなり近くなるみの濱千鳥

潮の満干を聲にてぞ知る

とあり。これにて潮の干たるを知るなり。」と。

嘗て義政に見えんとて上京せし時、我が庵はの歌を始め、

露おかぬ方もありけり夕立の

空よりひろき武藏野の原

年ふれどわがまだ知らぬ都鳥

隅田川原に家はあれども

などの歌を窺覽に達し、左の御製を賜はれり。

武藏野は茅原の野と聞きしかど

かゝる言葉の花もあるかな

道灌は武あり、文あり、智あり、略ある、眞箇の名將と謂ふべし。

(大町桂月)

一三 平家のあはれ

一、 故郷の花

落ちゆく平家の人々、或は式津の浪枕、八重の潮路に日を経つゝ、船

一三 平家のあはれ

治承四年
平家の都世

わがまだ知らぬ

此の一句「まだ知らざりし」とも傳へてゐる

窺覽
後土御門天皇

大町桂月
名は芳衛。文學士、文章家

式津
今の大阪市西區安治川口、江子島邊の總稱

平家海江
大宮を
くもる人連

三位中將

平維盛、重盛
の長子

大臣殿

平宗盛、清盛
の次子

淀の大渡
山城國久世郡

に棹さす人もあり。或は遠きを凌ぎ近きを分けつゝ、駒に鞭うつ人もあり。前途をいづこと定めず。生涯鬪戦を日に期して、思ひ思ひ心々にぞ下り給ふ。
權亮三位中將の外は、大臣殿を始め奉りて、然るべき人々は皆妻子を引具し給ひたりけれども、下様の者共は妻子を都に留め置きしかば、各、別を悲しみつゝ、行くも留るも互に袖を絞りけり。唯かりそめの別離をだにも怨みしに、後會其の期を知らざりけるこそ悲しけれ。相傳譜代のよし、み浅からず、年來日比の重恩も争てか忘るべきなれば、人なみなみに涙を押へて出でたれども、心は都に通ひつゝ、行くも行かれぬ心なり。
淀の大渡にては、南無八幡三所大菩薩、再び都へ返し入れ給へと、各伏拜み給へども、神慮誠に知り難し。薩摩守忠度、故郷の家々煙とほるを顧みて、

古郷を燒野の原にかへりみて

經盛
清盛の弟

修理大夫經盛

はかなしや主は雲井に別るれば

やどは煙と立ちのぼるかな

或宮女泣くく、口ずさみ給ひける、

住みなれし都の方はよそながら

袖になみこすいその松かぜ

是を聞きける人々、愈、袂を絞りけり。

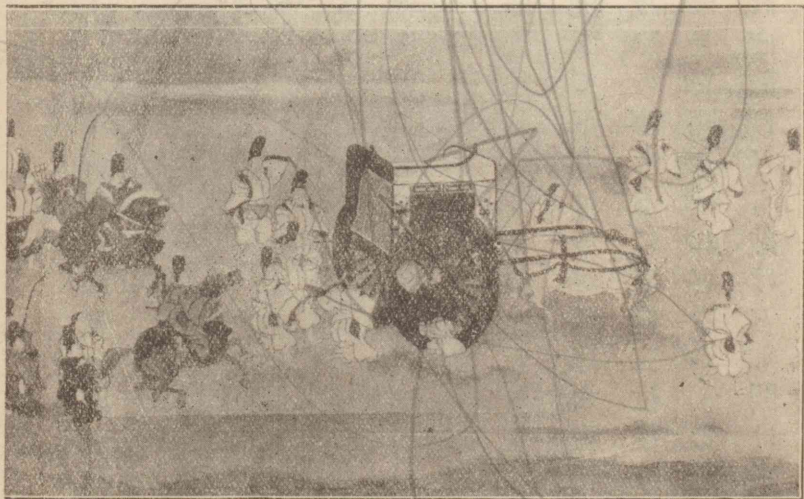
入道の舍弟薩摩守忠度は、淀の河尻まで下りけるが、郎等六騎相具して、忍びて都へ歸り上る。如法夜半の事なるに、五條三位俊成卿の宿所に行きて門を叩く。内には是を聞きけれども、かゝる亂れの世なる上、いぶせき夜半の事なれば、敲けども敲けども開けざり

俊成
藤原俊忠の子
定家の父。正
三位皇太后宮
大夫であつた
家が五條室町
にあつたので
五條三位と稱
せられた

けり。餘りに強く敲きければ、
やゝ久しくありて、青侍を出し、
戸を開かて之を問ふ。「忠度と
申す者、見參に申し入れたき事
ありて参りたり。」と答へければ、
三位大庭に下り、世に恐れて内
へは入れざりけれど、門をば細
目に開けて對面あり。

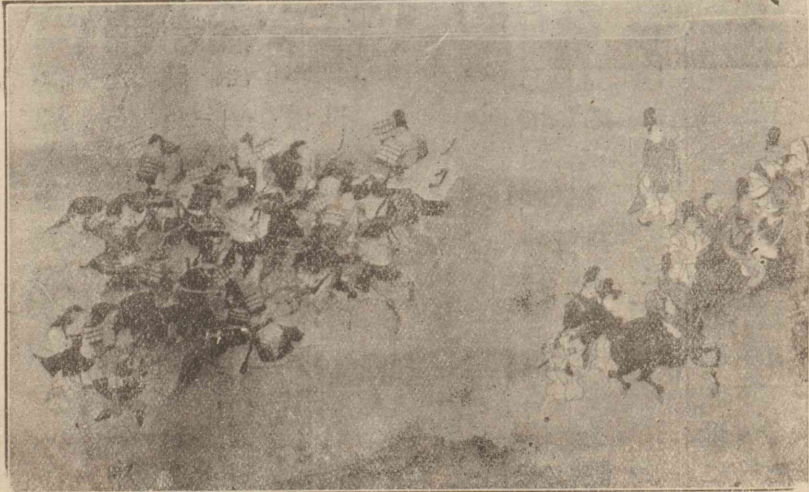
忠度宣ひけるは、「かゝる身とし
て、御ため憚あれども、所詮一門
榮華盡きて都に安堵せず、西海
へおち下り侍り。亡びん事疑
なし。世靜まりて後、定めて勅

平家の



撰の沙汰候はんか。たとひ身
は八重の潮路の底に沈むとも、
藻鹽草かき置く末の言の葉、後
の世までも朽ちぬ形見に傳は
り侍れかしと思ひ出でて、河尻
より忍び上りて侍り。これぞ
年ごろよみ集めたりし愚詠ど
もにて侍る。身と共に波の下
にみくづとなさん事、遺恨に侍
り。之を砌下に進らせ置き候。
勅撰の時は、必ずおほし召しい
てよ。」とて、卷物一卷泣くく、鑑
の引合より取出でたり。

都落



古詩

大江朝綱が「於鴻臚館」
「北客序」の中の語

三位感涙を流し、これを受取り、御詠一卷預り置き候ひ畢ぬ。これ永代秀逸の御形見、未來歌仙の指南たらんか。此の忽劇の中に御音信にあつかること、恐悦少からず候かな。たとひ浮生を萬里の波に隔つとも、御形見をば一戸の窓に納めて、勅撰の折は思ひ出て侍るべし、とのたまへば、忠度、今は身を波底に沈め、骨を山野に曝すとも、思ふ事なし。とて、馬にのり、古詩を、

前途程遠馳思於鴈山之暮雲

後會期無霑纓於鴻臚之曉淚

とうち上げうち上げ詠じつ、南を指してぞおち行きける。本文には「後會期遙」と書きたるを、忠度還り見るべき旅ならず、今を限の別なりと思ひければ、後會期無と詠じけるこそ哀れなれ。

三位もなごりの惜しくして、遙かに之を見送りても、あはれ世に在りしには、此の人どもにこそ諂ひ追従せしに、かはる習とて、今は門

千載集

勅撰歌集の一
二十卷。後白河院の院宣によつて撰集し、後鳥羽の文治三年（一八四七）奏覽する

志賀の都

天智・弘文二帝の都せられた所、都址は近江國滋賀郡滋賀村天津町御所村に亘る

一の谷

攝津國武庫郡平氏が據つて搦手とした處

を隔つる事の悲しさよ。と、哀れなるにも涙、優なるにも涙、忍の袖をぞ絞られける。

世静まりて後、千載集を撰まれけるに、忠度の此の道を嗜み、河尻より上りたりし志を思ひ出て給ひて、故郷の花と云ふ題に、よみ人しらずとて一首入れられたり。

樂浪や志賀の都は荒れにしを

昔ながらの山ざくらかな

とよめる歌なり。名字をも顯はし、あまたも入れまほしかりけれども、朝敵となれる人のわざなれば、憚り給ひて、只一首ぞ入れられる。亡魂いかに嬉しく思ひけん、哀れにやさしくぞ聞えし。

(源平盛衰記)

二、小枝の笛

一の谷の軍敗れしかば、武藏國の住人熊谷次郎直實、平家の公達、助

直實

一の谷の軍敗れ
平家の公達

定平直
一三 平家のあはれ

熊谷直實
源頼朝の臣、
後、僧となり
蓮生と號した

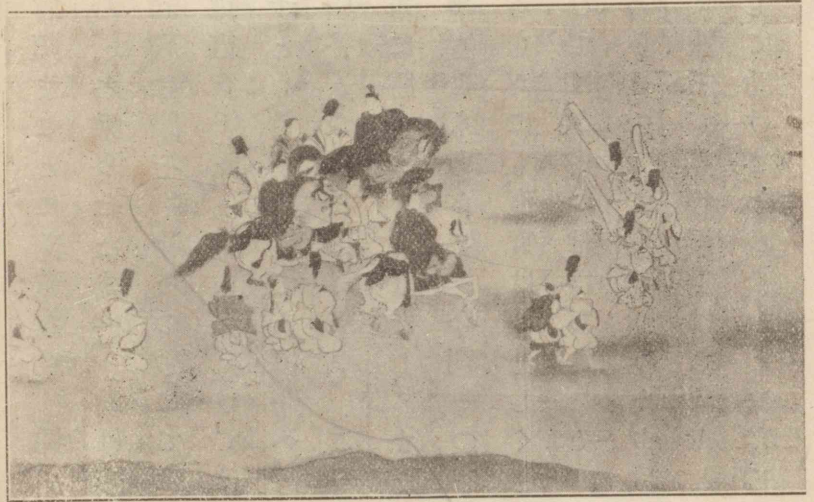
1. 諸王
2. 攝家
3. 中納言
4. 右大臣
左大臣
大政大臣
右大臣
上七ニト下三ノ月ト
ウケシシモノ



平家の落

船に乗らむとて、汀の方へ落ち
ゆき給ふらむ、あつばれ、好き大
將軍に組まばやと思ひ、細道に
かゝりて汀の方へ歩まする所
に、こゝに練緯に鶴ぬひたる直
垂に、萌黄匂の鎧着て、鉞形打ち
たる兜の緒をしめ、金づくりの
太刀を佩き、二十四さいたる截
生の矢負ひ、滋籐の弓持ち、連錢
葦毛なる馬に、金覆輪の鞍置き
て、乗りたりける者一騎、沖なる
船を目にかけ、海へ颯とうち入
り、五六反ばかりぞ泳がせける。

小次郎
直家をいふ。
一の谷の合戦
に父に従つて
戦場にあつた
時に年十六



都落

熊谷、あれはいかに。好き大將
軍とこそ見參らせ候へ。まさ
なうも敵に後を見せ給ふもの
かな。返させたまへ、返させた
まへ。と、扇を揚げて招きければ、
招かれて取つて返し、汀にうち
上らむとしたまふ所に、熊谷、波
うち際に押並べ、むずと組み
てどうと落ち、取つて抑へて、首
をかゝむとて、兜をおし仰けて
見たりければ、薄化粧して、鐵漿
黒なり。わが子の小次郎の齡
ほどして、十六七ばかりなるが、

容顔まことに美麗なり。「抑、如何なる人にてわたらせ給ひ候やらむ。名乗らせたまへ。助け參らせむ」と申しければ、まづかういふ和殿は誰ぞ。「物その數にては候はねども、武藏國の住人熊谷の次郎直實」と名のり申す。「さては汝が爲には好いかたきぞ。名のらずとも、首を取りて人に問へ。見知らむずるぞ」とぞ宣ひける。

熊谷、あつばれ大將軍や。この人一人討ち奉りたりとも、負くべき軍に勝つべきやうなし。また助け奉りたりとも、勝つ軍に負くる事もよもあらじ。今朝一の谷にて、我が子の小次郎が薄手負ひたるをだにも、直實は心苦しく思ふに、この殿討たれ給ひぬと聞き給ひては、父母の君たちさこそは歎き悲しみ給はむずらめ。助けまゐらせむ」とて、後を顧みたりければ、土肥梶原五十騎ばかりにていて来る。熊谷涙をはら／＼とながして、あれ、御覽候へ。いかにもして助けまゐらせむとは存じ候へども、味方の軍兵雲霞のごとく

土肥
次郎實平
梶原
平三景時

とれけし
ある
すつ
り
は
ろ
ろ

に満ち／＼て、よものがしまゐらせ候はじ。あはれ、同じうは直實が手にかかけ奉りて、後の御孝養をも仕り候はむ」と申しければ、只、何様にも、疾う疾う首を取れ」とぞ宣ひける。熊谷、餘りにいとほしくして、何處に刀を立つべしとも覺えず、目もくれ、心も消えはてて、前後不覺に覺えけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣く／＼首をぞ搔きてける。「あはれ、弓矢取る身ほど口惜しかりける事はなし。武藝の家に生れずば、なににしに只今かゝる憂き目をば見るべき。情なうも討ち奉りたるものかな」と、袖を顔におし當てて、さめざめと泣き居たり。

首を包まむとて、鎧直垂を解きて見ければ、錦の袋に入れられたりける笛をぞ腰にさゝれたる。「あな、いとほし。この嘸城の内にて管絃したまひつるは、この人にておはしけり。當時味方に東國の勢何萬騎あるらめども、軍の陣に笛持つ人はよもあらじ。上藤

大將軍の御見
源義經
忠盛の子、
平正盛の子、
清盛・經盛等
の父

大將軍
源義經

エルサレム
パレスチナの
都府。地中海
岸から約三五
哩、キリスト
の墳墓がある
ナザレ
キリスト幼時
の居住地

はなほもやさしかりけるものを。とて、これを取つて大將軍の御見
参に入れたりければ、見る人涙を流しけり。聞けば、修理大夫經盛
の乙子敦盛とて、生年十七にぞなられける。それよりしてこそ、熊
谷が發心の心はいて來にけれ。件の笛は、祖父忠盛笛の上手にて、
鳥羽の院より下し賜はりしを、經盛相傳せられたりしを、敦盛笛の
器量たるによりて持たれたりけりとかや。名をば小枝と申しけ
り。狂言綺語の理といひながら、遂に讚佛乘の因となるこそあは
れなれ。
(平家物語)

一四 泉

私は六月初、エルサレムから馬で三日の旅をして、ナザレへ行つた。
午後の日ざかりには、大抵泉に近いおほきな無花果のかけに休ん
だが、それでもパレスチナ六月の暑氣は、陽カタル後の私を非常に

パレスチナ
アジアトルコ
の西南、シリ
アの地中海岸
地方

活ける水
舊約全書第十
六章にある語

惱ました。皮膚に感ずる暑熱もだが、眼から脳に傳はる暑さは實
にたまらぬ。山は白つぼい石灰岩質の山路は白つぼい石路、木す
ら橄欖なんかは白つぼい緑で、空はたゞけばかん／＼鳴りさうな、
ほんの愛想の雲の片だもない露骨な青天。土造の家は案外涼し
いが、見る眼には唯白つぼく光つて、要するに、眼のむかふ所盡くこ
れ白熱地獄である。見る／＼眼がちら／＼する。頭がくら／＼
して來る。咽喉がいらく／＼する。水、水、水が欲しい。水は容易に
ない。無いと思ふと、ますます／＼劇しく渴いて來る。飢餓と一口に
云ふが、飢は渴に比べると餘程手ぬるい。餓死はまだ好い。渴死
は死んでも浮ばれない。日本の様な水に不自由せぬ國では、本當
に水の有難味は分らぬ。聖書に所謂活ける水「生命の水」の譬喩の
眞味は、パレスチナの様な處でなければ、眞劍に味はへない。理窟
でも何でもない、實際パレスチナでは、水が即ち生命である。昔か

シリヤ
 アジアトルコ
 の一州、小ア
 ジアの南、地
 中海とアラビ
 ヤとの間に介
 在する
 サマリヤ
 エルサレムの
 西北部にある
 ヨセフ云々
 この事は舊約
 全書創世記第
 三十七章にあ
 る

ら命をかけて井戸を争つたりしたのは無理がない。がはパレスチ
 ナを旅した頃は、あちらの雨期が過ぎたばかりの時、泉は處々に
 滾々と湧いて居た。泉の目標は茂つた緑である。緑の中には必
 ず泉が隠れて居る。泉は大抵大きな圓石或は角石で馬蹄形に周
 圍を疊み、出口を一方に開いてある。銀錢を瓔珞の様に聯ねて、頸
 飾或は腕飾にして、色の浅黒い眉の濃い、黒眼の凄い、険な顔のシリ
 ヤ女が、昔リベカやサマリヤの女がした様に、素焼の甕を頭に載せ、
 素足で水を汲みに来る。或は流れ口で洗濯したり、又は所謂井戸
 端會議をやつて居る事もある。羊や驢馬や、杏の荷を積んだエル
 サレム行の駱駝が、落水の溜に頸さしのべて居ることもある。ド
 タンの泉が忘れられない。それはサマリヤの山路が、今二里餘り
 で下ガラリヤの平野に出ようと云ふ處で、昔ヨセフが、父ヤコブの
 命により、十人の兄を探しに來て捉へられ、埃及の人買に賣られた

舊跡である。此の日は朝陰に、かのヤコブの井戸に近いサマリヤ
 のナブルス町を立つて、サマリヤの舊都セバステエーを見て、シレ
 ーと云ふ村で晝食晝眠し、然る後また馬に乗つたが、午後の熱はま
 た格別で、唯一吹の風もなく、私は馬上に疲れ果てた。案内者も馬
 子も初はやけに歌つて居たが、到頭黙つてしまつた。人間三人、馬
 三疋、煎りつける日の下を、唯喘ぎに喘いで行く。三時稍過ぎる頃
 でもあつたか、丘の角を一廻りすると、長い袋の様な浅い谷が現は
 れた。谷は爪先上りになつて、向ふの低い丘の麓に盡きて居る。
 眼をあげて先づ嬉しく見たのは、其の丘の麓に、ほんの一簇だが、こ
 んもり茂つた緑の森であつた。緑も緑、染めた様な、水が滴りさう
 な、しかも眼がさめる様に鮮かな緑の森であつた。其の梢から、修
 道院らしい建物が少し見えて居る。此の森を見たばかりで、私の
 沸つた頭が冷えて來た。私の乗つた白馬か足搔を早め出した。

天正教考の
 修業所

天主教
ローマ法王を
教長に仰ぐ一
派のキリスト
教。日本では
舊教と稱す

そろ／＼胡瓜の畑なぞが見えて来た。百姓が水をかけて居る。パレスチナの空氣は餘りに乾燥透明で、近く見えても中々遠いが、それでも到頭其の緑の森に來た。無花果・桑・柘・榴・杏・ポプリ・ラ・葡萄などの廣い葉や小さい葉が、艶々と潤うた緑を重ねて、あたりは白熱世界に、唯一點の緑の島を作つて居る。此の様に眼がさめる様な緑は、餘程潤澤な水の養を待たなければならぬ。果然數歩にして緑の源に來た。それは徑一丈もありそうな泉だ。水が満々と湛ひて溢れて居る。と見れば、頭の中央を刺つた天主教の修道僧が二人、白い體を泉に浸して、首だけ出して居るが、周圍の石に綱をかけて、それにぶら下つて居るのを見れば、泉の深さが思はれた。泉の傍には僧衣が脱捨ててある。乗捨てた二疋の驢馬が草を食うて居る。私は旅僧が羨ましくなつた。私の馬は遠慮なく泉の溢れ口にあつい蹄を踏入れて、長い頭をさしのべ、鼻を鳴らしなが

ミレージ
蜃氣樓のこと

ら、長く／＼水を吸うた。飲みながらずん／＼泉に寄るので、裸僧が泉の中から叱々と叱つた。案内者は、此の泉が即ちヨセフが兄達に打込まれた穴の跡だ、と言ふ。そんな事はどうでもよいが、場所も好し、水も多し、本當に好い泉だと思つた。旅僧等の様に眞裸になつて飛込まずに、此のまゝに過ぎるのが残念だつた。今も堪へ難い暑い日は、なつかしいドタンの泉が、一瞬間ミレージになつて、私の眼前に現はれる。それから其の夜泊つたエニンの泉も好かつた。エニンは、サマリヤの山がガラリヤの平野に盡きる處で、疎らに棕櫚の立つた村である。宿のすぐ前に泉が湧いて居た。泉を出ると、水は最早四尺ばかりの流水になつて、潺湲と音を立てて流れた。十四夜の月明りて、宿の庭から見て居ると、甕を戴いた婦人の影や、杖を持った牧者の影や、羊や牛や驢馬の影が、水聲・月光の中に、薄墨の映畫の様に、往つたり來たりして、何とも云へ

ぬ面白い夜であつた。

(徳富蘆花―新春)

徳富蘆花
名は健次郎。
小説家、文章
家

アンブルサ
イド
ウキンダーメ
ア湖の北端
にある小邑
ウキンダー
メーア
イギリスのラ
ンカシャー州
とウエストモ
ランド州との
境にある湖

一五 湖畔の感想

私は或夕暮、アンブルサイドの宿を出て、ウキンダーメーアの湖畔を、夜の更けるまで物思ひつゝ、逍遙した。牛が小舎に歸つたあとの牧場の徑を、一筋細くどこまでも辿つて行くと、柔かな青草に夜の露がしつとりと落ちて、何處からか薔薇の花の香が漂つて來た。目を上げれば山は四圍にあつた。何とも云ひやうのない靜寂の感が、高い山の頂に宿つてゐる。

小徑をどこまでも行きつくせば森があつた。夜目にも美しい夏姿をした英國の若い男女が、幾組となく樂しげに歩いてゐた。私には、彼等までが其のまゝの姿で、靜な自然の中に織込まれた畫のやうにも思はれた。森を出てスコッチ風の石垣に劃られた道

暫く行きつくと、聽て桃色の美しいカーテンに灯の映る家々の立並ぶ小村のはてに、大きなウキンダーメーアが、鈍い銀色をして横はつてゐた。

私はひた／＼とさざ浪の寄せる岸邊に立つて、遠く霧の中にひろがる湖の果に目を落した。近くには蘆の葉が夜風にそよいでゐた。見てゐるうちに、霧の中から權の音が、夜の沈黙を破つてゆるやかにひゞいて來ると思ふと、黒いボートの影が蘆の中から現はれたりした。多くは男が權を取つて、涼しさうな白い夏服の女等が舵綱を操つてゐた。

一つ二つボートが岸についてしまふと、あとはくつきり靜になつて、物音一つ無い夕闇の中に、靜な水が鈍い薄明を流してゐた。蘆の葉づれの音だけが、思ひ出したやうにざわ／＼と鳴つた。夜の色は見るまに濃くなつて行つた。霧が湖の上を這ひだした。

ぢつと岸邊に立つて、靜かな夜の中に眠つて行かうとする湖の色を見てゐると、私の心はだん／＼物悲しくなつて來た。何とも云へぬ大きな無常感が、心の底の方から湧上つて來た。物我の世界に齷齪する人間と云ふ憐な者の、淋しい運命を悲しむ心が、しみ／＼と湧上つて來た。私は此の靜かな湖畔に來る前の、ロンドンにおける自分の生活を考へて見た。そこにはたゞ、目まぐるしいばかりの、政治やら經濟やらの變轉し行く世相の中に、没頭して居る自分を見出すのであつた。けれども私は、決して物質の世界に齷齪する自己を嘲笑するものではない。社會は私に取つて、やはり大きな二六時中の關心事である。けれども私たちの心には殺したり、奪つたり、争つたり、泣いたり、笑つたりする日常の生活の他に、やはりかう云う大きな自然の前に立つ時、思はず形而上の何者かを思ふ心の芽が伸びようとする。私は其の何れの心も眞實だと思

社會問題
婦人事件

下田將美
時事新報記者

仁和寺
山城國葛野郡
花園村にある
光孝天皇の勅
願寺
石清水
山城國綴喜郡

ふ。そして其の一方だけに囚はれて一方を排斥し去るものは、結局人間の全部を理解し得ないものだと思つた。解き難い多くの現時の社會問題を解かんが爲には、結局其の鍵は片輪の鍵であつてはならない。本當に人間の心の底からの安心と要求とを満たし得る萬全の鍵だけが、此の問題を解く唯一のものとなるであらう。

(下田將美—山上の展望)

一六 仁和寺の法師

一 石清水

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心うく覺えて、ある時思ひ立ちて、たゞひとり徒歩よりまうでけり。極樂寺高良などを拜みて、かばかりと心得てかへりにけり。さて傍の人に逢ひて、年ごろ思ひつること果し侍りぬ。きゝしにも過ぎて尊

男山にある石清水八幡宮
極樂寺・高良神社
二つとも男山の山麓にある



浮田一蕙筆

くこそおはしけれ。そも参りたる人ごと山へ登りしは、何事かありけん。ゆかしかりしかど神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。といひける。
少しの事にも先達はあらまほしきことなり。

二 鼎かづき

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名残とて各あそぶ事ありけるに、酔ひて興に入る餘り、傍なる足鼎を取りて頭に被きたれば、つまるやうにするを、鼻を

おし平めて顔をさし入れて、舞出でたるに、満座興に入ること限りなし。暫し奏でて、後、抜かんとするに大方抜かれず。酒宴事さめて、いかゞはせん。とまどひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れて、息もつまりければ、打割らんとすれどたやすくわれず、響きて堪へがたかりければ、叶はで、すべき様なくて、三足なる角の上に帷子を打掛けて、手を引き杖を突かせて、京なる醫師がりゐて行きけり。
道すがら人の怪しみ見る事限りなし。醫師の許に差入りて、向ひ居たりけん有様、さこそは異様なりけめ。物をいふもくゞもり聲にひびきて聞えず。「かゝることは書にも見ず、傳へたる教もなし」といへば、また仁和寺にかへりて、親しき者老いたる母など、枕がみに寄りゐて泣悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝるほどに、あるもののいふやう、たとひ耳鼻こそきれうすとも、命ばかりはなど

吉田兼好
鎌倉時代の末
から吉野朝へ
かけての人。
本姓卜部、吉
田に住んでそ
れを姓とし
た。歌文の名
人。觀應元年
歿。六十九歳

か生きざらん。たゞ力を立てて引きたまへ。」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻は缺けうげながら抜けにけり。からき命まうけて、ひさしく病み居たりけり。
(吉田兼好—徒然草)

一七 地平線

私たちの借りて居た海岸の小さな家の二階の窓からも、近くの丘の上からも、波うち際へ行けば勿論のこと、いつも空際に太く描かれた水平線が見られた。
朝、眠から醒めて半身を起せば、ガラス窓に、その一線の空と水との區劃が、すぐ眼に入つた。家から續く岬角の頂へ行けば、ほとんど半圓以上を劃するこの天水の一線が、私たちを取巻いた。時には屋根の上から、思ひも寄らない方角に、この平かな線的一端がうか

んだ。

この一線を前に、私たちは、胸まで波に浸して立つてゐた。時々沖からの大波が、頭より二三尺も高く、この線の存在をかくして、おつかぶさつて來ることがあつた。私たちはその波に逆ひ、跳り立ち、飛上つて、砂原の方へ押されながら眼を開けると、まともに、今までよりは一層太く、一層くつきりと、更に一層近く、この一線の存在が明かになつた。

朝も、晝も、夜も、私たちは、いつもこの一線を前にして暮してゐた。ある日、私たちは、砂丘のために外海から隔てられた潟の中を、遠くまで船を漕いで行つた。一方の陸によつた方には松林の崖があり、海に近い方には砂山越に波頭だけが時々見られるばかりで、いつもの水平線は暫くその姿を私たちの前から隠した。その砂山の中腹には、月見草が悲しく咲いて、その影が静かな瀉の中へ落ち

てゆれてゐた。時々波の響が、その砂山を揺がすやうにきこえて来た。

青い空は、まろらかな腹を砂山の上へすれ／＼にして垂れかゝつてゐた。その砂山の向ふに果しない水の領土が廣がつてゐるとは思はれないほどの静かな氣分が、瀉のなかには漂つてゐた。それでも瀉の水は海へ通じてゐるので、知らず／＼に私たちの船も、流されるやうに瀉と海の接する方へ運ばれてゐた。

不意に私たちの前へ、いつもの太い一線が、初めての存在を示すやうに、ぱつと爆發でもしたやうに描き出された。暫くの間でも、無視せられてゐたのを憤るやうに、儼然として私たちの前へ迫つた。船から下りると、白い砂原が、午日の光を反射して、私たちの眼を射た。大海の底にそれ／＼の世界を持ち、生活を營んで居た幾つかの貝は、波にもまれ、碎かれて、空しき残骸を白日の下にさらしてゐ

た。大きな浮木が、何處からともなく流れ寄り打上げられて、倒れ

た。墓石のやうに横つてゐた。

湧き立ち、湧き返る波が、急傾

た。碧玉色の輝きは、

ふやうに攻め上

私たちがそ

から迫る

の前

私

自然の變化
さきとち

テムス河
北から来てロ
ンドンを貫流
し大三角洲を
なしてイギリ
ス海峡にそゞ

か
私は
この水平
いて浮び上
船床の圓窓から
いものになつてしま
と追つて行かなければなら
七十五日の航海が、私の足を、テムス河畔の
につれて来た時は、濃い黄色な霧が、ロンドン市を包みはじめると

一月の中旬であつた。

水平線の包圍を脱れた私は、三尺と隔てぬ先きの判明しない霧の中を、馬車や、自動車や、電車や、荷馬車の警笛を、夢の中のものゝやうに耳にしながら、歩いて行つた。私の世界は急に狭められた。一間を直径とした圓形内が、私の視線の及ぶ範圍になつてしまつた。室内にはいつても、街上と同じく執念深い霧が私の身邊を包んでしまつた。いくら歩いて、動いても、手をふつても、私の視界はこれ以上に擴げることには出来なくなつた。
私はまた、以前の水平線が描き出した廣い天地が戀しくなつた。そしてまた、私の眼前には、遠く水と天とを眺めながら、砂丘の上を親と子とが歩いて行つた夏の日の光景が、誰か舊い畫工の描き出した一幅の畫面のやうに浮上つた。

(吉江喬松―若き自然)

一八 旅ごゝろ

響りんく音りんく
馬は蹄をふみしめて
そのかぐろなる鬣は
その紫の雙の眼は
えだの緑に袖觸れつ
馬上に謠ふ一ふしは

打振り打振る鈴高く
故郷の山を出づる時
涼しき風のふき亂り
青雲とほく望むかな
あやしき鞍に跨りて
げにや遊子の旅の情

あゝ幼くて國を出て
偕も繋がぬ舟のごと
偶ごとしかへり來て
蔭を岡邊に尋ねれば

ひがしの磯べ西の濱
ゆめ長きこと二十年
昔懐へばふるさとや
松柏すてに折れ摧け

徑を川べに求むれば

野草は深く荒れにけり

菊は心をおどろかし
高きに登り草を藉き
檜原に迷ふ雲落ちて

蘭は思をいたましむ
惆悵として眺むれば
涙流れてかぎりなし

去ねくかゝる古里は
噫よしさらば今日よりは
あやに驟く彼方をも
湧立ち騒ぐ彼方をも
いづれ心の宿とせば
秋の實りはとるがまゝ
秋の光は履むがまゝ

再びいふにたらずかし
日行き風吹き彩雲の
白波たかく八百潮の
彼處の岡もこの山も
繁れる谷の野葡萄に
深き林のみみぢ葉に

島崎藤村
名は春樹、新體詩人、小説家

本誓寺

東京市深川區仲大工町にある。淨土宗京都知恩院の末寺

菊池容齋

名は武保。歴史畫の大家。明治十一年歿九十一歳

響りんく音りんく
馬はかうべを回して
かへりみすれば古里の

打振り打振る鈴高く
雲にいなゝき勇む時

檜原は目にも見えにけるかな (島崎藤村「落梅集」)

一九 愛兒の記念

「愛兒の記念」を解して、藤村の理想とする位を云ふ

深川の本誓寺に詣でて、五百羅漢の畫幅を拜觀したる事ありき。
畫は菊池容齋が經營慘憺の筆に成りし大作にて、春秋の彼岸には、これを掛列ねて供養し、普く有縁の參拜を許す由なれば、友人平出君を誘ひて歩を運びしなり。容齋が執筆の因縁については、哀れなる物語あり。今日廣く世に行はるゝ前賢故實は、此の歴史畫家が畢生の心血を絞りにて描き成し、以て風教を補はんとしたるもの、

平出君

名は鏗次郎
日本風俗史に
通ず、明治四十四年歿
今上陛下
明治天皇

福田行誠

芝の増上寺の住職。明治二十一年歿、年八十三歳

辱くも今上陛下が「日本畫士」の號を賜ひしも、これが爲なるべく、孝明天皇が和氣清麿に神號を追贈あらせられしも、本書が其の動機となりしなるべしとも傳ふ。されど初は、此の十年苦心の作も發行の書肆なく、上梓の資財なく、久しく筐底に籠めて、徒らに紙魚の棲スミカとなるを待つばかりなりしかば、此の事餘りに情なく、折節は忘年の親友なりし福田行誠に向ひて、堪へがたき遺憾の情を漏したりき。



菊池容齋

時に幕末の頃、江戸牛込に加藤金兵衛といふ商人あり。手の中の珠とかしづきし一人の女、年頃にもなりしかば、或方に嫁入らせしに、幾ほどもなくして身まかりぬ。婚禮の折持參の衣服調度、今は

こなたに置きても詮なし。たゞ歎の種ぞ」とて婿の方より里方へ返す。里方には受取らず。「一旦遣はしし女の道具は即ちそなたの物。それを返さるゝは、死したるものを離縁するやうにて、草葉の蔭にもいかばかり悲しからん。是はそなたへ。」「いやこなたへ。」と押問答の果、金兵衛は腕拱きて、さらば吾に思案あり。今深川におはす行誠上人は、浄土宗の大徳、古今の名僧と聞くに、此の聖に託しまゐらせなば、衆生濟度の便ともし給ひて、亡き女が往生の縁ともなりぬべし。といふに、即ち相談は決しかの調度を賣却し、なほ首尾をあはせて、一千兩の金を行誠にさゝぐ。さてこそ行誠は容齋を招きて、喜ばれよ。御身の志は成りぬ。印刷の料は調へ得たり。とあるに、容齋は涙ぐむまで嬉しく有難く、脱稿の後凡そ二十年にして、こゝに前賢故實の出版に取りかゝりしなり。「年來の宿望は今しも遂げたるに、いかにして此の大恩にむくゆべき。」と尋ぬるに、

行誠は「善いかな。さらば五百應眞の圖を畫きて供養し給はば、亡者の爲、施主の爲、いかばかりなる功德ならん。御身の満足より、延いては世間の満足も、ひとへに世を早うせし少女の爲、それを悲む父母の爲なるを。」と示す。「それこそ吾にはふさはしき業。いかで加藤氏の名を萬世に朽ちせぬばかり。」と、沐浴齋戒して描き上げたが、此の本誓寺の什物なりとかや。

われ等が參詣せし折も、くさくさの供物を捧げたるが中に、小兒の玩具の珍しく面白きを取集めたるがあり。これも近頃愛兒を失ひし人の、其の遺物をこゝに納めしなりとの事なりしが、一わたりあはれと見たるばかりにて、さして心にも留らず。畫幅の由緒も平たく聞きたるまでにて、容齋の筆法はとあり、思想はかゝりなど思ふまゝの事を言散して、さて、過ぎにき。今思へば淺はかなりしことかな。「昨日は人の身の上、今日は我が身など、古めかしき言ひ

すすさのり物すかたす
すす
ある時は
ある時はあり
のすさびに
くかりきなく
てぞ人はこひ
しかるべき
(古歌)

ぐさながら、今こそひし／＼と心の底に浸みぬれ。吾も一昨年の夏長女を失ひぬ。長女は名は光、時に七歳。笑ひさゝめき遊び戯れしものはかなき病に、忽然と此の世を去るべしとは誰か思はん。我が身既に四十に近し。此の後爲すべき事の奥も測り知られたり。唯我が子のみぞ我が誇わが望なりしを、一朝にして死の手に奪ひ去らるゝこと、あらばあらるゝことか。かくても過さば過さるゝことか。ある時はありのすさびに過してき。なくてぞまことのあはれさは知りぬる。よくもあしくも咲出でたる花の手折らるゝはさてありぬべし。固き蒼の人の目にとまるともなくて、不意の嵐にもぎ取られし恨はいかばかり。年たけて、少しにても世にあるかひの務をなしたらば知らず、やう／＼物のあやめも覺ゆる程に、早くももとの闇路に歸りなば、かゝる者のありしと知るは、家の内の人ばかり。世にも知られて、空しく來りまた往く

愛妃
弘徽殿の女御
恆子

こと、いかに悲しきことぞ。
豊太閤が朝鮮征伐を思ひ立ちしは、老いての後やう／＼儲けたりしみどり兒に死なれて、鬱悶やる方なく、いかにしてか其の悲みを忘れんが爲なりと傳ふることのあるを、歴史家は、そは英雄の心事を解せず、着々として歩を進めたる經營に、心づかざる僻事なり」といはん。されど凡人にもせよ英雄にもせよ、人の情は同じきものを。當時の秀吉が胸の内を思ひやりては、是非は知らず、傳ふる事のまた所以ありと思はざるを得ず。「華山天皇は愛妃を先だてし御悲みに堪へ給はざりし其の機に乗じて、藤原道兼がそゝのかし參らせしかば、乃ち宮中を遁れ出でて、出家せさせ給ひき。後にぞ道兼が欺けるなりと知りて、悔しく思し召しける」と、古史には記したるが、果して法皇は悔み給ひけんや。かれ佞臣が欺けるなりとは知りつゝも、それも得菩提の善知識、亡き人のためには、よくこそ

佛も傳ふ
又心

朕を誘ひけれ。」とのがれ去る道兼を見送りて満足して御髮は下し
給ひけんかし。おほけなき例を引くにはあらねど、今我が身に思
ひしむにつけて、あらためて昔の跡を顧みるなり。健かなる者は
日々の務に勵みて、其の悲みを忘るべし。悟ある者はせん方なき
世の習と、術なき思にしづまざるべし。あはれ身も心も弱者の
奮ひ立ちて忘るることあはれも得せず、さりとて一筋に思ひあきらむる
こともならず、つくづくあはれと日毎に同じ歎をくりかへすかな。

(藤岡作太郎—國文學史講話)

藤岡作太郎
國文學者。文
學博士。東京
帝國大學助教
授明治四十三年
年終、四十一

悴
額山陽をさす

二〇 悴の世話にならる 禮收
幸使に侍が一筆にてたまふるを待たるる
解程迄氣をお移りもあらざる其の所地

とぞや、懐き入らばおぼろに、
さる事なく、おぼろに、おぼろに、
おぼろに、おぼろに、おぼろに、
おぼろに、おぼろに、おぼろに、
おぼろに、おぼろに、おぼろに、
おぼろに、おぼろに、おぼろに、
おぼろに、おぼろに、おぼろに、
おぼろに、おぼろに、おぼろに、
おぼろに、おぼろに、おぼろに、
おぼろに、おぼろに、おぼろに、
おぼろに、おぼろに、おぼろに、

賴梅圃
名は静子
山陽の母。

古今集
醍醐天皇の勅
により紀貫之
等が撰した

名も上らざるもよかくは母の心は
 中上なるもよき中よびたく加筆中
 生が母まづは何かの心れり身并うど
 けしく中よびまゐるせんぬがたが
 紫月言
 頼梅圃

二一 和歌の感興

古今集の歌は、詞すなほに餘情ありて、おほくは一唱三歎するにた

へたり。

も、ちどり

讀ハ知らず

も、千鳥さへづる春はものごと

あらたまれどもわれぞふりゆく

此の歌を吟ずれば、老人懷舊の情を感ずべし。

世の中にさらぬわかれのなくもがな

千世もといのるひとの子のため

此の歌を吟ずれば、孝子愛親の情を感ずべし。

風吹けばおきつ白波たつた山

夜半にやきみがひとり越ゆらん

此の歌を吟ずれば、貞婦思夫の情を感ずべし。

忘れては夢かと思ふおもひきや

ゆきふみわけてきみを見んとは

此の歌を吟ずれば、君子不忘故舊の情を感ずべし。此の類、外にも

忘れは

在原業平

世の中に

在原業平

風吹けば

讀人しらす

秋の花をよめし
レイヤセーワツヤ

わねしとかこころ

つづみ

八代集
古今・後撰・拾遺・金葉・詞花・千載・新古今の
八代勅撰集を
いふ

武士の

金槐和歌

定家

俊成の子。鎌倉時代の有名な歌人。新古今、新勅撰集の撰者

久方の
古今集紀友則

なほ多かるべし。古今集以後、八代集に至りては、あげて數ふべからず。中に翁が常に好んで吟ずる歌一首あり。鎌倉三代實朝の歌に、

武士の矢なみつくろふ籠手の上に

あられたばしる奈須のしの原

此の歌を定家卿評して、鬼をとりひしぐ體といはれしとぞ。誠に勇壯をもてすぐれたる歌なり。外に此の體の歌多くは見えず。さて、春秋のあはれをいひ、月花などを詠めし歌も、たゞ其のまゝに寫しとりて、さながらみるやうにあるは、なにのをかしきふしもなけれど、かの詞つゞきたくみに、よくいひかなへたりと見ゆるよりは、感ふかうしてすてがたく覺ゆ。

久かたの光のどけき春の日に

しづこゝろなく花のちるらむ

庭の面は

新古今集 源頼政

夕されば

金葉集、大納言源經頼

秋風に

新古今集、左京大夫顯輔

津の國の

新古今集、西行法師

庭の面はまだかわかぬに夕立の

そらさりげなくすめる月かな

夕されば門田の稻葉おとづれて

あしのまろやに秋かぜぞ吹く

秋風にたなびく雲のたえまより

もれいづる月の影のさやけさ

津の國の難波の春はゆめなれや

あしのかれ葉に風わたるなり

是等の歌、不盡の景氣をうつして、さながら目に見るがごとく覺ゆ。折にふれて之を吟詠せば、襟懷を清くし、塵想も消ぬべし。西行が、「わが佛法は倭歌によりてすゝむ」といひし、さもありなんかし。わがともがらも、吟詠をたすけ性情を養ふには、たよりなきにあらず。されば倭歌のすてがたきはこゝにあるべし。但し此の頃の歌は

あたらしくいひいでて、一ふしをかしくきこゆるはあれど、ことばの外にけしきおぼえて、あはれふかきはなし。いかでか人の心を作興する益あるべき。

(駿臺雜話)

二二 顯家卿の北の方

先帝
後醍醐天皇
源中納言
北畠顯家

先帝の御時、源中納言みちのくの軍をあまたしたかへ給ひ、道々を平げて、美濃の國までおはしけるよし、さきだちて聞えければ、うへよりはじめて、たのもしきことにおぼし給ひけるに、阿倍野の露と消えさせ給ひけり。と、刑部丞友成が、そのきはの有様を、参りて泣くくかたるに、燈火の消えぬるやうになん人々の心はなりにける。御父の卿はいかばかりおぼすにか、さきだちし心もよしや中々にうき世の事を思ひわすれて

御父
北畠親房

北の御方はたゞ伏ししづませ給ひて、さらに御心地もなかりけるを、さわぎておもてに水などそゞぎしほどに、またの日の夕暮のほどに、すこし御心地の出でさせたまひて、

玉の緒のたえもはてなでくり返し

おなじ浮世にむすぼほるらん

なほ「おなじ道に」とおぼしたち給へる御けしきのいちじるく侍りければ、立去り給はで、人々のまもりければ、御心にもまかせ給はで、観心寺といふ山寺にて、御ぐしおろして住ませ給へるに、

そむきても猶わすられぬ面影は

うき世の外のものにやあるらん

こゝに三年が程過し給ひて、世の騒もしばししづまりければ、さすが故郷の方や思ひ出でさせ給ひけん、吉野山をたどりいでさせ給ふとて、

観心寺
河内國南河内
郡にある

いづくにか心とゞめん三吉野の

吉野の山をいでてゆく身は

親房卿の御許にしばくおはしまして、曉方に立出でさせ給ひけるに、御名残の盡きさせ給ふまじき御事にてありければ、顧みさせ給へるに、有明の月いとさやかに山のは近く見えければ、

別るれどあひも思はぬ三吉野の

峯にさやけきありあけの月

阿倍野を過ぎさせ給ひけるに、こゝなんその人の消えさせ給へる處。とつげければ、草の上に倒れ伏させ給ひて、

なき人の形見の野べの草まくら

夢もむかしの袖のしらつゆ

このほとりに、刑部丞友成が世をそむきてありけるを尋ねさせ給ひけるに、いそぎ参りて御有様を見奉るに、さしもゆかしくわたら

せたまひける御よそほひの、いつしか、かはりおとろへさせたまひけるにやと、涙とゞめあへて、住吉天王寺のほとりまで御おくりに参りて、處々あないしけるに、天王寺の龜井の水のほとりの松の木をけづらして、

後の世の契のためにのこしけり

むすぶ龜井の水ぐきのあと

と書きつけ給へり。それより友成入道は歸りにけり。一とせ尋ね來りてかたりけるに、いとあはれにおもひ奉りて、その後天王寺へ参りけるに、御筆の跡の消えもはてずして残りけるを見参らせ、そゞろに袖をしぼりにけり。その後舊都に上らせ給ひて、母君もともに世をそむきおはしけるが、さきだち給ひて、又のとしの春うせさせ給ひけり。とぞきこえし。日野中納言資朝卿の御女なりき。

(吉野拾遺)

吉野拾遺
隠士松翁の著
吉野朝時代の
逸話を記した
もの

皇后宮
昭憲皇太后

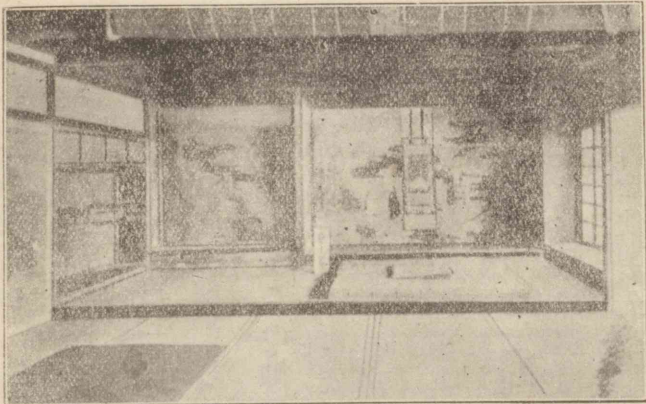
延元四年
(一九九九)
大木林大天

二三 御袖の涙

吉水院は、延元のむかし、御醍醐天皇のわたらせ給ひしところにて、楠木正行をはじめ、忠義の人々の守護し奉りし所なり。假の宮居とは申しながら、いと狹隘なる處にて、みそなはず皇后宮にも、吉野の皇居はかゝる所なりけるよと、思し召す御心のほど推量り奉るもかしこし。御遺物などこまやかに御覽ぜられ、殊に昔をしをばせたまひ、御涙にむせばせ給ふ。御供の人々もうちしをれて、袖をばぞぬらしける。後醍醐天皇は、延元四年八月九日より御惱ありて、次第に重らせ給ひ、朕、國賊をほろぼし、天下を平げざるを恨む。と仰せたまひ、また、のちの南朝の帝をはじめ、仕へまつる忠臣、義士、朕が志を體し、力をつくして朝敵を打ちほろぼせ。もし命に背き、義を輕んぜば、君も繼體の君にあらず、臣も忠烈の臣にあらず。と仰せご

と遺したまひ、終に同月十六日の夜、劍を按じて崩じたまひぬ。御

敬三
此の文の作者
香川敬三。當
時皇后宮大夫
であつた



吉水院御座所

葬送の御事など、かねて、御遺勅ありしかば、御終焉の御かたちを改めず、棺槨を厚くし、吉野山の麓なる塔の尾の山陵に葬り奉りきとぞ。心なき者だにも此の事を聞きたらんには、切齒扼腕にたへざるべし。かしこくも皇后宮の御涙にくれさせ給ふ御こゝろの中、おしはかり奉りて、敬三もなみだせきあへず。

この院の内に、御醍醐天皇の御像を安置して、吉水神社と稱し奉るよし、宮司の奏するにまかせ拜みたまふ。それより塔の尾なる後醍醐天皇

の山陵に詣てさせ給ふ。此の御道筋は殊にけはしくて、御供の人々も困じはてたるが、御厭もなく登らせ給ひ、山陵の御前におはしつきて、いとねんごろに拜ませ給ふ御有様、見あげ奉る人々もなみだせきあへず。敬三、

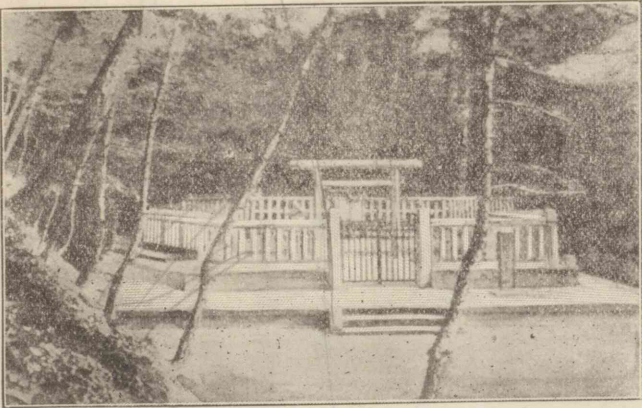
そのかみに我もありせば大君の

しこの御楯とならましものを

それより如意輪寺に成らせ給ひ、楠木正成・正行・正儀・菊池武光・兒島高德などの畫像をも御覽ぜらる。また正行の死を決し、如意輪堂の扉に、かへらじとかねておもへば梓弓なきかずにいる名をぞとどむる。と、矢じりもて記したるをも御覽ぜられ、如意輪堂に入らせらる。此の堂は昔焼けうせて、今のは假に建てたるよしなり。正行主従死を決し、先帝の山陵にまうで、この堂にて一族主従百四十三人の姓名を過去帳にかきつらね、かの歌をしるしけん其のむか

君

しをしのばせ給ひてや、堂の内をしばし御覽ぜらる。日もはや西



塔 尾 の 墓

におちて空も何となく雨をもよほしければ、御宿にかへらせ給はんことを乞ひ奉り、又前にのぼらせ給ひしつゝらをりの險しき山路を下らせ給ひ、吉野町の竹林院なる御宿にらせ給ひてのたまふやう、すぎし日より雨ふりつづき、道のおしきに、今日亦朝よりふりぬべき空のけしき、山陵へまうでさせ給はんはかたくや。と、大夫の申しつる、いかゞとおもほしながらも、しひて出てにしかひありて、山陵を拜みつるぞいと嬉しき。と。又此の度の吉野にも

のしたまふこと、花のためならでもばら此の山陵に詣て給はんと
の御心におはしまししよし仰せらる。いとありがたきことにこ
そと畏みぬ。

吉野にて遊ばされたる御歌の中に、

塔の尾の御陵に詣て給はんとする道にて

吉野山みさゝぎ近くなりぬらん

散りくる花もうちしめりたる

竹林院にて

村雨は晴れたる今日もふりし世の （香川敬三）

宮居たづねて袖ぬらしけり （香川敬三—繁暉日記）

一茶

小林彌太郎。
信州の人。俳
人。文政十年
歿、六十五歳

二四 一茶小品

一 鶏の蹴合

東海寺
東京府下北品
川にある寺

東海寺に詣でけるに、鶏どもの跡を慕ひぬることの不不便さに、門前
の家に寄りて、米一合ばかり買ひて、董たんぼゝのほとりに散しけ
るを、やがて、仲間喧嘩を幾所にも始めたり。其の内木々より鳩雀
はらゝと飛來りて、心靜に食ひつゝ、鶏の來る時、小早く元の梢へ
逃去りぬ。鳩雀は蹴合ひの長かれかしとや思ふらん、士農工商其
の外様々のなりはひ、皆かくのごとし。

米まくも罪ぞよ鶏が蹴合ふぞよ

二 老懷（香川敬三）

十六日晝頃、煙管の中塞りてければ、麥わらのやうに、竹を削りて、さ
し入れたるに、中にしぶりて、ふつにぬけず。竹の先僅か爪のかゝ
るほどなれば、すべきやうもなく、缺残りたる齒にて、しかとくはへ
て引きたりけるに、竹はぬけずして、齒はめりくとくだけぬ。あ
はれ、あが佛と頼みたる、只一本の齒なりけり。さうなきあやまち、

を、
老いたりけり。釘ぬくものにてせば、するくとぬけぬべきもの

齒はぬけてあなた頼むもあもあみだ

あもあみだ佛あもあみだ佛かな

なつかしや籠かみやぶるきりくす

かりくと竹かぢりけりきりくす

三 丸儲け

去る十六日、中風に吹倒され、直ちに北邙の泥となるべかりしを、此の正月一日初鶏に起きて、東山の旭のみがきなせる玉の春迎へんとは、我ながら珍しく、さながら生れかはりて、再び此の世に出でし時、もかくこそあらめと覺え侍る。

今年からまるまうけぞよけさの春

文政四年元旦

蘇生坊 一茶

(一茶選集)

二五 筆の歌

月花めづるみやび男が

向ふつくゑの紙のうへ

走ればやがて歌成りて

星照り日出て鳥うたふ

天地ゑがく繪だくみが

倚るやみなみの窓の下

動けば臆て晝は成りて

水落ち木生ひ草あをし

二五 筆の歌

壯心鬱勃天を衝く

英雄の手に觸るゝ時

落筆のもと龍蛇飛び

雲煙くらく地をおほふ

慷慨淋漓怒髮立つ

志士の腕に執られては

片言 隻句鬼神泣き

哀音ながく世につたふ

功成り名遂げ業卒へて

身は棄てらるゝ竈カマの中

煙と化して消ゆれども

武島羽衣
國文學者。名
は又次郎

布施太子
葉波國王の子
須太孛。本生
譚に釋迦の前
身として記し
てある

王妃
葉波國皇后

うらまぬ筆の心清しや

(武島羽衣)

二六 布施太子の出城 その一

(王妃の馬車登場 供奉の列なく只一人の女官陪乗せるのみ。馬車止る。

王妃馬車より下りて太子の馬車に走せよる。太子急ぎ馬車より下る。)

王妃 お、須太孛シニタヌや。(太子を抱いて)わたしの愛兒、わたしの寶。

お前は行つてはならない。行つてはならない。

太子 (やさしく王妃を抱いて) 母上よ。お心をお静かに。

王妃 そなたに行かれて、わたしは、どうして生きて行かう。わた

しの望はなくなつてしまふ。わたしの命は滅びてしまふ。わ

たしは――

太子 (しづかに) 昨夜くれぐれも申上げてお暇乞を致しました

やうに――

王妃 あゝ昨夜、夜どほしわたしは考へあかしたのだよ。そなたと離れても、これから生きて行かれるかどうか、ためして見たのだよ。わたしはお前がもう私から去つたものと思ひ定め、神々にわたしの心を支へて下さるやうにお祈りして、できるだけ耐へようと努めてみたのだよ。けれどわたしは、昨夜そなたのないうわたしの生活が、どんなものであるかといふことを知つた。とてもわたしには耐へられるとは思へない。お前はどうかあつても去つてくれてはならない。

太子 (肅然として) 母上よ、わたしは行かねばなりません。

王妃 いゝえ、そなたは行つてはなりません。わたしが泣崩れて死んでしまふ事をそなたが望んでくれるのでなかつたら、須太撃や。どうか思ひ出しておくれ。わたしがどんなにしてそなたを育て、來たかを。そなたが小さい時、わたしはそなたを、わ

葉波國
太子須太撃經
及び本生譚に
見える國名

王様
須太撃の父

たしの瓔珞を飾つてあるどの珠よりも美しい、どの珠よりも稀な珠のやうに愛しました。實際に、そなたにそれだけの價があつたのだ。そしてそなたが長じてからは、そなたはわたしの誇であつた。私の師であつた。わたしは葉波國の全領土よりもそなたを尊んでゐる。そなたのやうな氣高い人の母であることの名譽を、王妃の位よりも重んじてゐる。思へばそなたは、わたしの胎内に宿るには、あまりに尊かつたのだ。抑もわたしが、どのやうにしてそなたをわたしのものとすることができたのだとおもふ。そなたの場合では、わたしは特別わたしのものといふ感じを持つてゐる事が許されねばならないと思ふ。何故と云つて、わたしはそなたを神に祈り求めて授けられたのだから。王様とわたしとは、世嗣のないのを嘆き悲しんだ。その他すべての充ち足つた幸福も、その嘆の前に輝を失ふかと思はれ

帝釋天様
印度民族の崇
拜する神

る程だつた。王様は、尊敬すべき祖先から傳へられ、多くの記念すべき名譽ある戦争によつて外敵から完全に護られた、此の美しい豊饒な國を嗣ぐ者のないことを思ふごとに嘆息遊ばした。そして遂に王様とわたしとは相談して、帝釋天様に子供をお授け下さるやうに祈願を立てることになつたのだよ。わたしはちほどんなに嚴かな儀式と、淨い齋戒と、永い斷食とを以て熱心に祈つたことだらう。そして終にわたしたちの切なる祈が聽かれて、わたしは身重になり、臙てそなたが生れた時に、わたしたちの喜はどんなだつたらう。その時ほど王様のお顔が幸福に輝いたのを見たことは、どの凱旋の時にもなかつた。金甕の水で玉のやうな肌を洗ひ、練りのいゝ絹布で包んで、しみぐとそなたの顔を見た時、わたしは涙がこぼれて止まらなかつた。その瞬間から、そなたはわたしの命になつてしまつたのだ。そな

たはまた、あの立太子式の日のことを思ひ出しておくれ。そなたが元服するのを待ちかねて、あの盛な、目もまぶしいやうな華麗な儀式で、王様の手づからそなたの頭に冠が載かせられた時、[㊦]宮殿も揺ぐやうな萬歳の聲の裡に、そなたが百官と庶民の前に、太子として初めての挨拶をした時、そなたはどんなに立派で、王者の威嚴を備へて美しく氣高く見えたことだつたらう。その時わたしは母の幸福に酔ふやうな氣がした。須太孛や、考へてみておくれ。その幸福が皆空しくなつてしまふのだ。幸福が大きかつただけに、それを失つた後の苦みは一層ひどいだらう。どうぞ、おはれな母を、その恐しい淋しさのうちに残さないておくれ。

太子 母上よ、あなたのお心はよくく解ります。あなたはどんなにわたしを愛して下さつたでせう。色々思ふと、わたしの胸

は清い清い涙で一杯です。あなたは此の法界に愛といふもののあることを、わたしに知らせて下さった最初の方でした。わたしはそれを至上の眞理と認め、その眞理にわたしの一生を捧げて奉仕しようと思つてゐる、その愛といふものは、實はあなたから初めてその觀念の種子を賜はつたのでありました。あなたはわたしにありあまる程の母らしきめぐみをかけて下さいました。その種子こそ、あなたのわたしに賜はつた一番尊い賜物でございました。わたしはあなたから賜はつた生のまゝの愛の粗鑛から、純粹の黄金を鍊出しました。あゝ母上よ。わたくしが今、あなたとお別れせねばならぬと決心するのも、實にその愛のためです。その愛の至上命令に従ふのです。あなたと今お別れするのが、却つて本當にあなたを愛する道であると信じるところからです。永久にあなたとお別れしたくないからこそ、今お

別れせねばならないのです。昨日くれぐれも申上げた通りです。不滅の都で、再びお目にかゝり、そして其處なる宮居に、永久に共に棲みませう。何卒わたくしをいさぎよく送つて下さい。

二七 布施太子の出城その二

王妃 須太孛や、わたしはそなたの心が解らないのではありません。そなたがどんなに母思ひであつたか、わたしの思ひ出が一杯です。それがわからないでどうしませう。それだからこそ、そなたと別れることが耐へられないのだよ。わたし、どうあつても、そなたを遠くの山に遣つてしまふことは出来ません。年とつた母親の愛といふものが、どんなに切ないものだから、どうか察しておくれ。そなたに云ふが、わたしは此の二三年めつきりと體が衰へてきてゐますよ。老の淋しさが、もうわたしをとり

まくやうになつて來ました。見ておくれ。わたしの此の鬢の霜を。

太子 わたくしの心を弱くしないで下さい。

王妃 わたしの白髪頭が冠の重さにも耐へられなくなるのはもうぢきです。そなたと別れてしまつたら、わたしはきつと床につきますよ。

太子 あ。

王妃 わたしが死ぬ時、そなたはわたしの臨終の枕べに侍しては下さらないのですか。わたしの最後の息が呼ぶのは、きつとそなたの名にちがひない。その時、そなたは、わたしを抱いては下さらないのですか。母親がその獨兒を育てるときに、自分の末期の唇を潤ほして貰ふことを願はないものがあるだらうか。

太子 母上。

王妃 そなたは、わたしのとむらひの列にも、つらなつて下さらないのですか。

太子 お聞き下さい。母上。あな母としての熱愛が今のわたくしを躓かすならば、あなたにとつて恐しい禍ですぞ。母なるものの名の上に、永久に天の呪を呼ぶのですぞ。母性の愛の中に巧みにつくられた悪魔の陷穽が、今はつきりとわたくしに見えます。よくお聞き下さい。わたくしは母上から愛の觀念の種子を賜はりましたが、私はそれを地に蒔いた時に、不思議にも其處には藥草と毒草とが同時に生えました。私がその二つを見分けることが出来るやうになつたのは、ほんの最近のことなのです。これは實に恐しいことでした。一つは人類を平和に導き、一つは争鬪に誘ふのです。一つは涅槃に、一つは輪廻に、其處に深い陷穽がかくされてゐるのです。種族の愛は、それは法

王子の母は隣人

の光で照らされないならば、眞の愛と異なるばかりでなく、相乖く
のです。母子も一たび隣人でなくてはなりません。隣人の愛
のみ眞の愛です。世嗣に豊かな領土を遺したい欲望が、父上を
多くの戦に驅りました。我が子の聲色に觸れてゐたい執着が、
今世にも尊い旅程からわたくしを阻まうとしてゐるのです。
今私が退轉して此の城に留まれば、母上もわたくしも共に滅び
るのです。葉波國の國民も滅びるので。どうぞわたくしを
行かせて下さい。勇ましく送つて下さい。

王妃（すゝり泣きながら）あゝ、わたしはどうしても遣らねばな
らぬのか。いゝえ。わたしはやることは出来ません。別れる
ことは出来ません。

太子（跪きて母の手を取り）尊き母上よ、勇氣を奮ひ起して下さ
い。あなたの生れながらの美しい知慧と、敬虔な心を呼醒まし

て下さい。たとへ今お別れ致しましても、やがて天上で、限ない
命を持つて――

王妃 わたしは眩ゆい天上よりも、此の葉波國の黒い土がなつか
しい。たとへ短い命でも、そなたの黄金色の髪を見、わたしの胎
内から出たその鶯色の肌に觸れてゐたい。あゝ、わたしは今の
苦みを見るよりは、母とならなかつた方がよかつたと思ひます。
（地に伏して泣崩れる）

太子（無言のまま王妃の璽珞の揺ぐのをちつと見つめて居る）

二八 布施太子の出城 その三

間。群衆の喧噪の聲舞臺のうしろに起り次第に近づく。「太子殿下。」檀
特山へ――の叫聲時々聞ゆ

太子（突然立上る）ではお別れいたします。〔馬車の方へ行か

檀特山
北印度ガンダ
ラ國にある山

んとす)

王妃 (起き上り、怨めしさに) あゝ、そなたはどうあつても行くのですか。(咽び泣きながら)お行き。死んでしまふから。わたしは生きてはゐられないから。

太子 (思はず二三歩母の方に寄りんとし、踏止まり、顔色蒼ざめ、一瞬間沈黙の後、決然として)お死になさい、母上。

王妃 (眞青になつて)えゝ。

太子 (天を拜しながら)悪魔よ退け。今自分の決心を鈍らさうとするものは禍だ。永劫に呪はれるであらう。たとへ肉身の母であつても外道だ。悪魔だ。我が前に立つ女人よ。汝と我と何の關はりがあるらう。

王妃 須太孛。

太子 今の自分の發心を妨げて永久の冥罰を蒙るよりも、惠深き

天よ、願はくは速かにわが母に死を給へ。

王妃 おゝ。

太子 女人よ。わしは今そなたの子としてそなたの前に立つてゐるのではないぞ。今わしは衆生のものだ。今わしはわしを生んだ女につくものでなく、天につくものだ。あゝ、今わしの道を阻むよりも、死は寧ろそなたにとつて幸だ。今わしをそなたの懷から人類の手に返せ。そなたが帝釋天からあづかつてゐたわしをも一度帝釋天に返せ。

王妃 (天に向つて兩手を絞りながら)南無帝釋天。

太子 天王帝釋よ。此の女人を守らせ給へ。

王妃 (地にひざまづく)

(間。群集の喧噪益々はげしく近づき來る)

王妃 (突然、涙に洗はれたる顔を上げて)行け、須太孛よ。行つて無

上の悟を開け。道を成じて、父と母と、葉波國の先祖代々の靈と、すべての民を救つておくれ。

太子 おゝ母上。(走せよつて王妃の腕に身を投げかく)

王妃 おゝわたしの愛兒。(一度抱きしめ、やがて靜に太子を放し、跪きて太子を拜し)わが師よ。

太子 (瞑目して佇立す)

王妃 そなたは私の善知識です。わたしの救主です。もつたいない。もつたいない。そなたを生んだわたしの身體は、何といふ祝福されたものであつたらう。わたしに何の價があつて、數多い女の中から選ばれたのだらう。いつくしみ深き天よ。いと小さきはした女が、今さゝげまする心からの感謝をお受け下さいまし。

太子 (涙ぐみ) あなたのお言葉はあまりに勿體なう御座います。

若しわたくしに何か尊いものがありますならば、母上よ、それは實にあなたに、かくも高貴なあなたに負うてゐるのでございませう。

王妃 そなたをわたしの私有と思つたのは、わたしのあやまりであつた。わたしの思ひあがりであつた。わたしは今、つぎりとそれが解りました。天よ、わたしの僭越をお赦し下さい。そなたは本當に人類のものです。天のものです。わたしは今、そなたを、わたしの手から放します。天に返します。お行き。須太拏、そなたの使命のために、そなたを産んで人類に贈つたわたしの勳は、永久に人類の記憶から滅びることはないであらう。わたしの名譽は眩ゆい程です。

太子 尊き母上よ。諸天もあなたを嘉し給ふてございませう。

(倉田百三―布施太子の入山)

倉田百三
小説家、戯曲家

大正女子國文讀本 卷七終

大正十四年一月十日	大正十四年一月五日	大正十四年九月十日	大正十三年九月廿二日	大正十二年十一月廿八日	大正七年九月廿八日
第一修正發行	第二修正發行	第一修正發行	第二修正發行	第三修正發行	第四修正發行

大正十四年度
臨時定價
卷七 定價金參拾貳錢
全拾册



著作權所有

著者

發行者

印刷者

東京市外中野大塚千六百二十五番地

保科孝一

東京市牛込區白銀町貳拾九番地

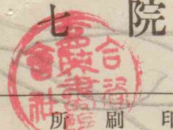
合資會社 育英書院

右代表者

目黑甚七

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

佐久間衡治



株 式 會 社 秀 英 舍

發行所

東京市牛込區白銀町二十九番地
振替口座(東京)七四二番

合資會社 育英書院

東京市京橋區南傳馬町二丁目
振替口座(東京)二八〇九番

目黑書店

